
痛みとウサギと追いかっこ

こぎん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

痛みとウサギと追いかけて

【Nコード】

N9719Y

【作者名】

こぎん

【あらすじ】

少年は異世界に迷い込んだ、勇者と魔王でもない第3の存在として、

世界征服しちやいなよ！あついでに神様も殺っちゃいなよ！そうすれば君は神様だ！

そんな感じで世界征服始まります。

ブローグ

「あと・・・5分だけ・・・」

いや、わかってるんだ

ここが自分の部屋じゃないことくらい

「現実逃避してても始まらないか」

目を覚ますとそこは金の苔のベットとよくわからない木の根が見える壁にに囲まれた洞窟だった。

それにしても夢ではなさそうだなあ

つねった頬が痛いや・・・

苔で覆われてるけどこのふかふかしたベッドみたいなのは何なんだろうか・・・

ああとつても気持ちいいなもう一眠りしてもいいかな？

ごめんよ、パ。ラッシュとつても眠いんだ・・・

そのままもう一度夢の中へ落ちていった

俺はたしか翌日が休みって事もあって最近熱中しているRPGゲームをしていて

気がつけばもうすぐ3時って時間までやりこんでいた

明日、というか今日は友達と一緒に旅行に行く約束をしていたので睡眠を取らないとダメだと踏んで布団に入ったはずだったんだった

「ふっ、認めたくないものだな二度寝したのにも関わらずまったく状況が変わってません！実は夢でしたーっていう夢落ちを期待したんだけど」

俺はいつもどおりジーパンに通気性のいいＴシャツというラフな部屋着だった

「そつえば寝巻着は着てたはずなんだが」

寝間着よりかはマシなのでうろついてみようかな

これはまたマイナスイオンがたっぷりと補充できそうな・・・ジャングルですね

そして目の前に自分の身長＋20cmくらいの向日葵にしか見えな植物が生えていた

おれの身長は170くらいだから十分育った向日葵なんだなあ
周りの木が日の光なんて遮ってて他の植物がほとんど無く苔がはえているのにもかかわらずその向日葵はとてもキレイな大輪の花を咲かせていた

怪しいと思いつつも近寄ると向日葵が『嗤った』

これはやばい

とつさに後ろに下がろうとしたが手に噛みつかれてしまった

「ぐっ・・・はなせっ！」

「ギャー」

無理やり向日葵を引っ張るとあっけなく向日葵は途中からちぎれて動かなくなった

「いつから向日葵はこんなに活発に栄養を求めるようになったんだよ」

栄養が少ないのかそれともともと肉食植物なのか

幸い腕の傷はかすり傷程度ですんでいた

「こんな向日葵でも種は食用になったりしないかな・・・」

痛みより食欲が勝った瞬間だったがしばらく種等を観察していると向日葵は小さな紅い石のようなものを残して消えてしまった

キレイな石だったのでそれをポケットに入れると壁伝いに歩いていった

「RPGならお金とか薬草とか落としてくれるはずなのに石ってどういうことなんだ」

しばらく歩くと滝がありここを下っていけばきつと人のいるところ

に着くだろうと川沿いに歩いて数分後

遠くから金属のこすれる音、と多くの足音が聞こえてきた

ここはまず日本であるわけが無いというより地球であることすらあやしい・・・

そんな所で金属の音＋足音って言われても安心できないむしろさっきの向日葵みたいなモンスターの可能性もある

さてここで問題です

俺はどうすればいいでしょうか？

- 1 何かの大群に助けを求める
- 2 このまま隠れて様子を見る
- 3 見つかる前に別の道を探して逃げる

俺は2を選ぶ！

1は論外うかつすぎる、3は見つかる可能性が高い、2ならばダンボールで敵の目を欺く作業員もいることだしきつといける！

おっと来たみたいだ

何を言ってるのかわからないけど馬？に似た動物に乗り両刃の剣を
持ったおっさんが何か叫んでる

「イーッ？ ニョルニンド？」

ダメだ、日本語でないどころか英語ですらなさそうだ・・・実は英
語で俺がヒアリングできてないだけという可能性は無きにしも非ず

「よし、行つたな」

ますます異界である可能性が高まってるんだけどここで捕まったら
解剖されてB A D E N D？

「うわぁ・・・これってフラグ？」

がさがさ・・・がさがさ・・・

「！！！？？」

そこには簡単に言えばデフォルトキャラクター

間違つてもかわいいとは呼べない生物、

耳に傷があり、手にはキセル、背中に秋刀魚を背負ってるウサギ
という3頭身しかないモノがそこにいた

「l s s r k 2 5 2 1 f s 3 4。 s m v k」

今度はまったく理解できない言葉だった。が敵意は感じられない。

「えっとここはどこで町はどっちでしょうか？」

そのデフォルトキャラクターはおもむろに手？を輝かせると

鳩尾に強烈なボディーブローを決めた

「ぐふっ……げげほ……」

「いえ……わしのこぶしはひやくまんぼるゝとゝじゃけえのお・
」

デフォルトキャラクターに殴られたとたんに奴の話している言葉が
理解できるようになった

「あー、なんで殴られたのかとか聞いてもいいかな？」

「おう！ぼーず！いいしつもんだあ……それはなそこにいぶゝん
かゝこうゝりゆうゝがあるからよお！」

「うん、わからん。まあ言葉が通じるようになったのは感謝するよ」

「ぼーず！ここであつたのも何かの縁だ！ええもんやろか！てゝー
だしな」

「そーいやぼーず！てめえの名前はなんてえんだ？」

「俺の名前は森 修・・・」

「だまらっしやい!」

「へぶっ」

あれ、自分の名前を言おうとしたら突然殴られたよ？痛みは無いけど口の中切ったみたい鉛の味がする

「あんたみたいなのは名無しで十分なんだよっ」

どうしよう、いきなり俺の名前は名無しになったようです

「って、人の名前をいきなり改名してんじゃねえよ！俺には修一ってなm・・・」

「せか→んど←ふり→すき→ー!!!!」

「ぐはっ」

「おいらぁ→呼ぶときは疾風のジョーって呼べ→やぁ→」

「おか・・・しい・・・だろ・・・」

デフォルメキャラクターのアップで俺の意識はそこで途切れた。

その1 RPGの基本は情報収集から

あの不思議な生き物に殴られてからどのくらい時間がたったのかわからないが太陽の位置から大体昼過ぎだと判断する

ここが異世界なのはよくわかったけどこれからどうすればいいのだろうか

変な生き物のおかげで言葉は通じるようになってるみたいだし

RPGの定番からするとこの世界の魔王的なラスボスを倒せば元の世界に返れたりするんだろうけどそういった場合大抵は、召還されて

「おお異世界からの勇者よ！私たちのために魔王を倒してくれ！」

つてのがお決まりなはずなんだけど

と視線を感じて後ろを振り向くと

これが山賊です！っていう皮の装備に身をつつんだマッスルさんがびっくりした顔で立っていた

「えっと・・・どこから見えました？」

振り向いた状態で問いかけてみる

「あーるピージーのていばんからって所あたりから」

ふむ、心の中の呟きのはずが口から漏れていたらしいわっ！ハズ

カシ！

体ごと振り返って咳を一つ、きつと自分の顔は真っ赤なんでしょうねー

「オホン！・・・初めまして、町はどちらでしょうか？」

数人いた山賊が全員一定方向を指差してくれた。

「ありがとうございます！では！さっきのは忘れてください！」

では！のあたりですでに全力で指差した方向へダッシュしている。

「お、追えッ！逃がすんじゃないよ！」

後ろの方から追っ手がやってくるのがわかる。

もしかしたらこのまま逃げ切れるかもなんて都合のいい考えだったようだ。

すぐに追いつかれて囲まれてしまう。

振り返って一人に話しかける

「えっとお金なんて持ってませんよ？」

とりあえず金銭を持ってないことを自己申告

「俺等は金が欲しいだけじゃねえんだ」

「・・・何が欲しいんです？」

「全部だよ、とりあえず《イツ》について知ってることを吐きな」
イツ・・・そういえばさっきそんな単語を聞いたな。

「それなら向こうへ向かう集団がそんなことを言っていましたね、それ以外は知りませんよ」

「そうか、ならてめえは用済みだ、こんなところでゴブリン共の餌にするより奴隷商にでも売って俺等のために金に換えてやるか！」

困った！大ピンチだ

自分の周りにはさっき話して奴を含めて4人、ナイフを持ってるから一気に襲われたらひとたまりも無い

となると

「先手必勝！」

大声で叫んで走り出す一步を踏み込むその瞬間前にいた2人はナイフを構えて腰を落とした

それを確認すると後ろへ全力で飛ぶ肘が右にいた山賊の顔に当たり倒れる、

そのまま右へ方向転換して走り出す。

少し距離が開いたところで足元の地面が消え俺は落ちた。

落ちた高さとしては1mくらいだろうそこから急な坂になっておりここまで転げ落ちてきた

周りの壁は自然とできたにしては整いすぎているところからみてきつと人の作ったものなのか魔物の巣なのかのどちらかだと思う

「いてて・・・ここは地下か」

周りの苔が薄く発行しているので真っ暗とまではいかないが見える範囲はせいぜい2メートルも無いだろう

向日葵のような生物がいなくても限らないので落ちて乾燥していた根っこの切れ端を持って出口を探して彷徨いだした

細い通路を歩いていると前の方から子供くらいの大きさの影が複数こっちへ向かっていた慌てて近くのわき道に隠れると

所謂 ゴ布林 と呼ばれるモンスターがゴフ！ゴフ！と言い

ながらゆっくりと通り過ぎていった。

「ゴブリンということは魔物の巣で間違いなさそうだな。」

さっきの山賊が言っていたことを信じるならゴブリンは肉食でパクリといかれちまうそうだ。

ほんと、この世界はいろんな意味で退屈させてくれないな、ご飯にされそうになったり、奴隷にされそうになったり

さっきのゴブリンとは逆の方向へ向かうと少し開けた場所に出た

そこにはゴブリン4体とひときわでかいゴブリンのリーダーのようなのが2体の合計6体がいた

さてこの世界の基準は知らないけど俺の知っているRPGならゴブリンはチュートリアルにでてくるような雑魚扱いなんだが

ゴブリン達の装備は棍棒と木の棒かなリーダーの方はナイフのようなものを持っている

今俺の武器はずっと持つてる乾燥した根っこと『安全靴』だ

普通の一般人は日頃安全靴なんて履いてないと思うんだが

俺の場合は過去に細い道でトラックとすれ違ったことがありその時に靴をタイヤにはさまれたことがある少し大きめの靴を履いていたこともあり骨折どころか怪我も無かったんだがその頃から安全靴を履くようになった。

ただし所々手が加えてあつて走つても不自由が無いようになってい
る。

手を加えてない安全靴で走ろうとしたことがあつたがその時は鉄板
の端が足の甲などに当たりとても痛かった。

さてまずは6体いっぺんに相手をする と確実に負けるだろうからで
きれば2体くらいをこちらにおびき寄せて片付けたい

ちなみにこの時の俺は『異世界』、『ダンジョンちつくな場所』と
いう二つの理由でハイテンションだった。

その部屋から少し離れると足元から石を拾い上げて投げる

カツンつと小さな音を聞つけたリーダーゴブリンは下っ端4体に
命令を出して確認させに来た

一列にならんだゴブリンが狭い通路を歩いてこちらへやってきた。

ゴブリンは天井が少し崩れて音を立てたと判断したのだろう後ろを
向いたその瞬間

俺は後ろから根っこを振り上げて一番後ろにいたゴブリンになぐり
かかった。

根っこは折れて使い物にならなくなったが襲われたゴブリンは倒せ

たようだ。

いきなりの奇襲にゴブリン達は少しの混乱を見せているその間に殴り倒したゴブリンの持っていた棍棒を拾い上げるのと同時に2体目のゴブリンの顎目掛けて振りぬいた。

ゴツっという鈍い音を立てて2体目のゴブリンが後ろに飛んだ。

2体目のゴブリンは3体目のゴブリンとぶつかったところで俺は2体目のゴブリンを踏みながら3体目のゴブリン胸元に蹴りを入れた

3体目は4体目を巻き込んで後ろに転がった。

3体目のゴブリンの喉を思いっきり踏みつけて4体目のゴブリンの顎を蹴り抜く。

4体とも動かなくなったことを確認する4体とも腹が動いているところを見ると気絶しただけのようだ、頑丈だな・・・ゴブリン

さっきの広場まで戻ってくると2匹のリーダーゴブリン達は広場の真ん中辺りにいた

まだリーダー2匹の他にはゴブリンは見当たらないがナイフぽいものを持った相手を二人相手するのはしんどいのでこっちに來てもらうことにしようか

作戦は石をリーダーに向かって投げると後ろの通路の曲がり角を曲がったところで待ち伏せる。

追ってきたリーダーが曲がり角を曲がったところで棍棒による一撃と蹴りで一匹しとめる

残り一匹も流れでしとめるという考えだった。

足元の石を拾い手前のリーダーに向かって投げる！走ってくるリーダーを曲がり角まで・・・って火の玉！？

リーダーは魔法なんて使えるのかよー

曲がり角をまがった所で火の玉が壁に当たり火の粉を散らした。

俺はゴブリンが角を曲がりきる前に棍棒をフルスイングするとリーダーその1は頭を軸に半円を描いて地面に倒れた。

間髪入れず顎を全力で蹴り抜く！さっきのゴブリンとは違ってゴリっという手応え？足応え？があった

最後のリーダーはナイフを振り上げてこちらへ走ってくる棍棒の持ち手をぐっと握ると思い切り突き出した

リーダーその2は棍棒は叩くもので突くことは無いと思っていたように顔面に直撃する。

後ろに2、3歩下がったのでそのままの勢いで胸を蹴り飛ばす

1メートルほど飛んだのを確認し足元からリーダーその2が落としたであろうナイフばいものを拾い上げると起き上がろうとしている

リーダーの頭を蹴る

最後の1撃は靴の角がクリーンヒットしたらしくリーダーその2は転がっていった。

そのあと少し待っているとその1とその2は向日葵と同じように緑の石とナイフばいものを残して消えていた。

「またこの石か今度は緑色って何かあるのかな」

とりあえずさっきの4体のゴブリンが戻ってくる前にここを離れるか

広場の奥にまた道を発見したのでそちらを進んで行くと鉱石のような石やきつとここでやられた人間の鎧と思われる物などが置いてあった。

「これは宝物庫だよな、となるとさっきのリーダーだと思ったゴブリンはこのボスだったのかな」

所々に金、銀のコインが置いてある！これはこの世界のお金かな

おれの中のRPGの鉄則

その1勇者とは家捜しするもの！

その2魔物の宝は勇者の物！

その3魔物と戦う時は全力で！

その4出会った魔物はとりあえず倒してみよう！

という鉄則があるのでとりあえず使えそうな物ををいただいていこう

ざっと見回すとコインの詰まった袋、ボロボロの鎧、何かの石

そして・・・腕輪？

必要なのはコインの袋の中に石を入れて腕輪を左手にはめる

「ちゃちゃちゃん！なぞのうでわを装備した！・・・もしかしてこれ単なる装飾品かな？」

こっちの鎧は使い物にならない・・・というより着方もわからないや

宝物庫に入った時と出てきた時では見た目が少し変わっただけで実際の戦闘力に変化は無かった。

出口を探して彷徨っていると階段を見つけた！ただし下り・・・

降りてみると悪臭が漂っていた。

ここは牢屋のようだが人がいれば助けてみるかもしれないし
つてるかもしれないし

牢屋だけあって見張りがいるな2体だけかな？ならこのナイフだけでいけるはず

2体のゴブリンの内一人は椅子に座って眠っていた。もう一人はその近くに立っていた

階段に背を向けた瞬間にすばやく近づいて立っていたゴブリンの口を押さえながら首をナイフで切る。

寝ているゴブリンも同じようにして倒した。

ゴブリンたちが消えると牢屋の鍵だと思われる鍵束と棍棒と両刃の剣が残っていた。

牢屋に近づくと牢屋の中には鎖に繋がれた人型の影がいくつか見えた。

「大丈夫ですか？」

俺の声に反応して数人の声が聞こえる

「たすけ・・・なのか？」

「たすかったの？」

ふむ生存者がいたようだ、地下に出口は無いだろうからって理由で降りずに出口探索しなくて正解だった。

「すぐにここから出しますね」

生存者は4人

最初はもつと数がいたらしいが一人また一人と数が減ったらしいこと

商人のキャラバンが野営中ゴブリンの大群に襲われここにいるメン
バーが連れ攫われたらしいこと

後で聞いた話なのだがキャラバンというのは品物を買付けに行く
際いくつかの商人などが襲われにくくするために集まって行動する
集団のことを指すらしい

なんとかゴブリンの巢から出た俺と貴族の娘だというリーナさん、
リステイさん、がっしりした体格のベルムンドさん、商人のグルマ
さんの4人は近くの村まで一緒に行動することになった

しばらく歩くと大きな川がありその近くに村があるそうなので野営
の装備もない俺等は急ぐこととなった。

衰弱しきっていたリーナさんを背負いながら近くの村を目指した。

村の入り口に差し掛かると警備の兵士の一人がこちらを見て走って
近づいてきた。

「大丈夫ですか！酷い様子ですがどうしましたか？」

「ゴブリンの巢で捕まっていたので保護して来ました」

「わかりました、こちらへ」

その兵士さんはすぐに衰弱した人たち部屋へ寝かせると医術士の手配してくれた。

その1 R P Gの基本は情報収集から (後書き)

小説は難しいとつくづく思ってしまう。

これから主人公にはいろいろと無双してもらったりハーレムをつて
考えてるとストーリーがめちゃくちゃになる不思議

その2 回復アイテムは大事 (前書き)

サブタイトルはその場の思いつき!

前は穴に落ちてゴブリンをドーン! - 人質救出! - 町到着! ↑ イマココ

追記: 通貨に問題が出てきたので多少変更しました

その2 回復アイテムは大事

「君が助けてくれた人たちはこちらで保護しよう、今日の宿は決まっているかい？」

商人のキャラバンがゴブリンの集団に襲われたのは一週間前らしく「ギルド」から搜索も出ていたそうだ

「いや、これから宿屋を探すんだがおススメの宿とかあるか？」

「コニード亭にするといい美人な女将さんがうまい飯を出してくれる」

兵士の一人はギルドの方に連絡しておくから明日報酬を取りに行ってくれという別の兵士に呼ばれて行ってしまった

「うまい飯とやらを食いにコニード亭とやらを探しますか！」

夕方ということもあり店じまいを始めている姿がちらほらみえる目的のコニード亭はすぐに見つかったというより看板の自己主張がはんばなかった。

他の店の看板は木を彫って作ってあるのにここのカンバンは極彩色の光を放っていた。

「いらつしゃい！泊まりなら10G食事・湯付なら20Gだよ！おや、みない顔だけどこの町は初めてかい？」

「もろもろ付でお願い、今日着いたばかりだね」

「そうかい！ようこそフューデイル1の宿コニード亭へ！」

現在の持ち金2235G 金貨、銀貨、銅貨等いろいろな貨幣と価値について説明をしてくれたコニード亭の《おねーさん》はこの女将さんでメリルさんというそうだ。

食堂ではメリルさんの旦那さんであるジョーイさんが料理を作っていた

厨房の中で赤いトカゲに羽根の生えたような生物が飛び回っていた衛生面とか大丈夫なのだろうかと気になったが他の宿泊客やジョーイさんも気にしていないようなので放っておく事にした

晩飯はスープとパンでスープは薄味がこのあたりでは主流だそうだ。満腹になった俺は自室に引っ込むと自分の持ち物を確認した。

ナイフつばいもの2本

コインの入った袋

よくわからない腕輪

以上・・・

ふわふわしたベッドで眠れるのだから満足する・・・か

ベッドに入ったとたんに眠気が襲ってきた。ZZZ・・・

「おい・・・聞こえるか。。。くそっナナシじゃないと通じないのか」

「ナナシ！私の声は聞こえているな」

あーはいはいばっちり聞こえてますよー

「我は貴様だ、いや貴様のなかに植えつけられた種というべきか」

種？そのうち俺の体を食い破って成長するの？

「いや実際の貴様の体の中にいるわけではない、貴様が出会った生物がいたであろうあやつの能力は あ生物が 望んだモノを相手に与える代わりに対となす同等の何かを相手に与えるというものでな」

ナニソレコワイ勝手に与えてその分料金を払えって詐欺みたいな能力

「今のところわかるのはやつがきさまに与えたのは「解説」と「俺様」くらいだな対となすのは「貴様の名」と「不運」と「俺様」だな」

うん、おかしいね！対って言うてるのにメリットが2つでデメリットが3つだよ、そして与えた「俺様」とその対の「俺様」ってなによ

「我には能力がありそれには反動もあるとそういうことだ、おそらく貴様も同様の能力が使えるはずなのだがそのうちわかることだ」

いまいち納得いかんのだが・・・ところでさっきから俺と話してるあんたは誰だ？

「我は貴様に廃k・・・いや与えられたモノもとより名など無い」

今廃棄って言ったよあの生物俺の中に自分にはやっかいなものだから廃棄していったのかよ

あんたじゃ味気ないなよし！『レオ』って呼んでやろう自分でも我って言ってるし

「いいだろう！我、レオはいつも貴様とにもある今はこのような時でなければ会話もできんがいつか語り合える時もこよう」

朝か・・・

今日も一日世界が平和でありますように

山賊とかゴブリンとかファンタジーはそれほど呼びでないんだよね実際のゴブリンは思った以上に気持ち悪くて全力で「殺し」にいったんだよねえ

ちなみに俺はふつーの一般人であって伝説の暗殺一家の息子だとか
凄腕の殺し屋でもないただの人だ

ライトノベルとゲームを好み友人と《拳で》騙りあたりする普通の
人だ。

さてご飯でも食べて「ギルド」とやらに行ってみるか！

【ギルド】モンスターの討伐・捕獲から家の掃除の手伝いなど数多くの依頼を冒険者等に紹介する仲介屋、各地に点在しその地域に応じた依頼があるFから始まりSまでのランクがありそのレベルに応じた依頼を達成し一定額を納めることでギルドランクを上げることができる。当然ランクが上に上がるほど難易度・報酬も上がっていく

ギルドに行くと中には入るとたくさんの人の合間をすり抜けるようにしてカウンターの前へ

「すみません！昨日守護隊の人にここへ来るように言われてたのですが」

「はい、ゴブリンの巣から救助なさった方ですね」

受付のおねーさんはとてもほんわかしていて話していると周りの時間ゆっくり進んでいる気がする

「えーっとおギルドにー登録はーされてますかー？」

おお！揺れた！おねーさんが笑顔で小首を傾げた瞬間たわわな果実がユサツと揺れたのを俺は見逃さなかった

「と、登録はしてないんだ」

おつといけないいけないい慌てて声が上がってしまった、あくまで紳士的に、紳士的に

あ、おねーさんも笑ってる・・・

「ではーこちらのー登録用紙にー記入してーくださいねー」

おお、我様の言ってた【解説】のおかげなのか文字が読めるそして書ける！

「ではーこちらへーどーぞーこの水晶にー手をーかざしてーしばらくーおまちーくださいねー」

水晶にしばらく手をかざしていると水晶の中心が黒く濁りだした

ナナシさんのおランクはあFランクからあスタートとおなりますうギルドカードはあ明日に完成しますのでえまた明日来て下さいねえ依頼は今からでもお受けることがあできますよおとのことだった

疲れるあの間延びしたしゃべり方はずっとも疲れる

ゴブリンの方の報酬は300Gで依頼としてはFランクの依頼だったそうだ。

ギルド加入の際に粗品としてもらったこの手甲付のグローブそれなりに使いやすそうなので装備して出店でも見て回ろうかなとギルドから出たところで声をかけられ振り向くと

キラキラの宝石がたくさんついた派手な鎧を来た剣士とケバイ化粧のねーちゃん、大剣を持った剣士の三人組が立っていた

「俺様はレイナルドⅡスフィーリアス！スフィーリアス伯爵家の次男である」

「私共はレイナルド様に使えておりますレイリアと」

「バルガスと申します」

「どうも、ナナシです」

伯爵ってどのくらい高い地位だっけかな

「やあやあナナシくん！君はとても運がいい！この私はこれからオーク討伐の依頼でダンジョンに行くのだが君も一緒に来ないかね？」

俺の見立てが正しければ盾が雑用を探していてちょうどいいところにFランク《新米冒険者》の俺が来たってところか

「報酬は300G、薬草とこの盾は前報酬であげよう」

まあダンジョンとやらの興味が無いわけでもないから着いていって

みるかな

「いいですよ！ただ道具を入れるバックが無いので買ってきます」

「いいだろうではこちらで依頼をしておくので東門の所で落ち合うことにしよう」

いろんな店があるけどバックなんてどこで売ってるんだろう

おお！獣耳の美人さんを発見した！あの人に道を聞いてみよう

「すみません！道具屋ってどこにあるかわかりますか？」

おや？このおねーさん驚いているように見えるんだけどなんでかな
俺変な事言ったかな？

「私は獣人族だよ？」

「そうなんですかーかわいい耳ですね」

顔が真っ赤になってうつむいてる姿もいいです！

獣耳、少し褐色肌、金色の髪、ライトブルーの瞳そしてもっふもふ
のしっぽ！

いいよね！尻尾を持つものは正義だよね！

「あつちに・・・道具屋があるよ」

「ありがと！おねーさんの名前は？」

「・・・イスカ」

「俺の名前はナナシ！」

と自己紹介したところで彼女がビクッと震える

「・・・どうしたの？」

「なんでもないの・・・またねナナシ君」

彼女は駆け足で人ごみの中へ消えていった。

どうしたんだろ・・・何か用事でもあったかな？とりあえず道具屋へ行こう

「いらつしゃーせー！ランタンから回復薬まで何でも揃うボルドー商会だよー」

あつっ！？あの店の周りだけ人が逃げてるよ・・・

「すみませーん」

「はい！いつもニコニコボルドー商会！今日のお求めは何でしょうか！本日はランプ油がともお買い得となっております！さあ！お客様は私どもの店に何をお求めになってまいられたのでしょうか！」

「ごめん、ちょっとこわい、ものすごい勢いでしゃべってるよこのおにーさん」

「今日冒険者になったんですがバッグとか必要なものを買いに来たんですが」

「ざわ……」

離れてこちらをみていた人たちが一斉にざわめきだした

「かわいそうにえたの」

「誰だよ初心者にボルドーさんとか教

「私今使える最上位の回復魔法用意しとくからね」

「あのおねーさんの下着は黒だった」

よし、わかった……とりあえず最後の人その話を詳しく聞こうか！

じゃなかった……おや目の前のボルドーさんがガッツポーズのような感じでフルフル震えている

「我らボルドー商会！」

ん？後ろから声が……

「いついかなる時でも」

「お客様第一に考え」

「いつでも安全な商品を」

「お届けいたします！」

おい・・・どこの戦隊物ですか？爆発したよ？ボルドーさん後ろにいたはずなのにいつの間にそこに？

「ボルドーさんの爆発が控えめだと！？」

「おいおい・・・明日フェーデル壊滅か？」

「いやまて！まだ終わったわけじゃない」

「あれは

幻のF！？アレの為なら牢屋に入ることと厭わない！」

最後の人！待てそのFを掴むのはおr・・・ゲフンゲフン確かにFは魅力的であるがいきなりおさわりは犯罪だ！ここは一言「素敵な胸ですね！揉ませていただけませんか？」と断りを入れるべきだ！

「そうだったな・・・ありがとう同士よ・・・」

言葉に出てないのに通じちゃったよ・・・

「お客様！失礼ですがお名前を伺ってもよろしいですか？」

「ああ、ナナシといいます」

「ナナシ様！私もボルドー商会は今後貴方様と友好的関係を築いていけると確信しております！」

「お求めの商品ですがこちらなどはいかがでしょうか！」

「商品A-15をここへ！」

「「「「よろこんで！……！」」」」

「」

もうここ道具屋じゃないよね

「こちらの商品は冒険者必須のバッグから水、薬草、野営装備など基本装備一式が詰まってお値段なんと500G！」

高いのか安いのかさっぱりわからん

「おや、ナナシ様この商品少し高いんじゃないかという顔をなされてますね！さすが！冒険者様！私どもも商人その駆け引きは忘れておりません！いつもなら500Gのこの商品！今回はなんと300Gにて御提供させていただきます！」

一気に200Gも減ったよ

「さらに！」

まだ何かあるのかよ

「今ならこのランプ油と戦闘でも採取でもどんなに乱暴に使っても切れ味の落ちにくい万能ナイフもつけてお値段そのまま300G！これでいかがでしょうか！」

すでに赤字じゃないのかこれ……

「あの、こ「んー！ナナシ様は商売上でいらっしやる！仕方ありま

せん！さらにこの雨をはじき寒さか身を守るのにとても役立つコー
トを3枚つけましょう」「

あーうんこんなにつけて大丈夫なのかって聞こうとしたんだけどコ
ートついちゃったよ

「・・・それでいいです」

「「「「「ありがとうございますあ！」「」「」」

商人こえええ・・・

ゴブリンを倒したお金は飛んだけどいっばいつけてもらえたしまあ
いいか

さて東門へ行こうか

その日、フェーデイルの村で「胸を揉ませてください」と言いなが
ら魔法使いの胸をつかんで黒こげとなり全治一週間の怪我を負った
勇者がいたと翌日の朝刊で広まった

その2 回復アイテムは大事 (後書き)

商人が元気になりすぎました

獣耳っていいよね・・・上目遣い涙目で獣耳たまりませんね・・・

さて次は伯爵さまとダンジョンです

どうするかなそろそろエロス&グロ交えていかないとテンションが持たないね

その3 戦闘開始 (前書き)

人物紹介ってひつ・・ようかな？

その3 戦闘開始

「まだ来ないのか？くそっ！あのガキこのレイナルド様を待たせるとは！これも貴様があのガキを使えば楽にダンジョンを進められるというから入れてやったというのに・・・」

「申し訳ありません」

この貴族様：レイナルド「スフィーリアスが東門についたのは3分程前だというのに従者とこのやり取りをすでに5回以上も繰り返している・・・従者つてのはよほどMな精神の持ち主か大きすぎる器の持ち主でないとできない仕事だと門番は思い出した頃にナナシがやってきた。」

「お待たせしました」

「遅いぞ！さっさとダンジョンへ行くぞ！」

「かしこまりました」

ダンジョンとは世界が自然と生み出した洞窟のようなもので気付いた時にはそこにあつたとされるためいつ誰がどのようにしてダンジョンを作っているのかは定かでない。

目当てのダンジョンは町の近くにあるらしいのでそこまで歩いていくこととなったがダンジョンに着くまでレイナルドの「俺様つてすごい話」を延々と聞く事となり戦闘が始まる前から気疲れしてしまった。

「よし！ここが『力』のダンジョンだ！よし！ナナシ貴様から先にダンジョンに入れ！」

「入れといわれても入り口が無いんだけど」

「・・・それに触れれば入れる」

ダンジョンの入り口は小さなオブジェのようなもので手で触れると自分の周りが輝いたと思ったら次の瞬間には洞窟の中にいた。

そのあと俺、バルガス、レイリア、レオナルドの順に入ると持ってきたランプをつけて歩き出した。

今回はゴブリンのときとは違って盾があり初PT戦だったがレイナルドのくだらない話の合間にダンジョンの様子聞いていたおかげでぼんやりと理解していた。

地下1階はゴブリン、スライム、大蝙蝠などのモンスターで1対1なら俺でもなんとか倒せるレベルだった

このときはまだ自分が囿としてこのPTにいれられたことを理解していなかった。

地下2階へを降りていくと大広間があり入って数歩進んだところにソレはいた。

2mほどの高さのゴブリンのような姿、防具のようなものを身にまとい、口から垂れた唾液、手に持った棍棒・・・アレがオークか

「一匹だけか俺様にかかれば楽勝じゃないか！お前ら！俺様の勇姿をみてろよ！」

とレイナルドが剣を抜いて切りかかる

「くらええ！」

バキン！

音を文字に表すとそんな感じだろうか

レイナルドの剣はオークに傷つけることなく折れてしまった。

ブオオオオオオ！

「グホッ！」

オークの一撃でレイナルドが吹き飛び壁に叩き付けられる自慢の鎧はオークの一撃で丸い凹みが見えた

「レイリス！坊ちゃまを！ナナシ！行くぞ！」

バルガスさんが叫ぶのに従い、オークへ駆け寄る近くで見るとさらに大きく見える。

ここに来るまでに学んだ事、俺の役割は相手をひきつけておいてバルガスさん達の攻撃のチャンスを作ること、なのでナイフっぽいものでオークを切りつける折れはしなかったものダメージもほとんどなさそうだ。

「避ける！」

バルガスさんの声が響いているが俺はとっさに盾を構えてしまった。オークの一撃は盾を砕き、レイナルドとは逆方向へ吹き飛ばされた。バルガスさんの大剣がオークの頭を粉碎し、オークの巨体が倒れる。バルガスさんはオークを倒した証拠としてオークの素材を剥ぎ取っていく、へこみのできた鎧を着けたレイナルドがレイリスさんと共にこちらへやってくる。

「おい貴様！貴様のせいで俺のこの剣は折れ、鎧はこの通りへこんでしまったではないか！すべて貴様のせいだ！」

見ていろって言ったのは自分ですよ？

「この剣と鎧の修理代として10万G払え！」

おいおい、そんな金持つてるわけ無いだろ？俺は初心者冒険者だぜ？2235Gしか持つてないぜ？

「そんな金持つてるわけ無いだろ？」

「これだから庶民は・・・貴様はこれから俺の奴隷としてこき使ってやる！」

ナニソレそろそろキレてもいいよな

「お！あんなところに宝箱があるではないか！見つけたのは俺様だから中身も俺様のものだ！」

宝箱に目掛けて走っていくクソ貴族様、毒針でもささって死なないかな・・・。

「レイナルド様！いけません！」

バルガスさんが制止をかけるがそれを聞かずに宝箱を開けるレイナルド

「中身は・・・」

カチツ

カリカリカリカリカリカリカリ・・・

壁の一部が開いていくのと同時に入り口が閉じていき、開いた所からオーク数匹のオークが押し寄せてくる。

「うわああああ」

レイナルドは叫びながらこちらへ戻ろうとしているが慌てすぎてこけてしまう。

《アイスバレット》【双断】

レイリアさんは氷の弾丸を打ち出しバルガスさんは大剣を振るうがオークの数が多く押され気味である。

四方をオークの群れに囲まれてしまった俺達に

「坊ちゃま！このままでは全滅です！撤退しましょう！」

バルガスさんがクソ貴族に進言するが

「俺様がオークごときを相手に逃げれるか！」

と突っぱねてしまう。

そこへひととき大きく紫のオークが現われた。

周りにいたオークは雄たけびを上げるだけで仕掛けてこないようになり紫のオークがどんどん近づいてくる。

「デイスオークだ！？このダンジョンにそんなモンスターはいなかったはずだ！」

バルガスさんは舌打すると剣を構えてデイスオークに向かっていく！
剣を振り下ろした時

何が起きたかわからなかった

大剣が折れて飛び

バルガスさんの体が粉々に砕ける。

デイスオークは持っていた剣を振っただけだった。

一番近くにいた俺は血飛沫を浴びてしまっていた、とても金臭い匂いがあたりに充満している。

「レイリス！あいつにオークどものが集中している今のうちに逃げるぞ！」

レイナルドとレイリスは水晶のようなものを持つと一瞬まばゆい光を出して消えてしまった。

オークたちの笑い声が響く

残るは俺とオーク達だけ

俺はまだ死にたくは無い、怪我は無いが恐怖で体が動かない。

震える足で立つと

ふつと静まり返る・・・

「貴様は逃げないのか？」

見た目はオークというモンスターなのに人の言葉を話している

「ひ、人の言葉を話すのか？」

声は上ずっていたが通じるだろう、足がガクガクしている

「人の言葉を話しているわけではない、人間！貴様は俺の言葉がわかるようだな」

楽しそうに笑うオークは不気味である。

「先ほど貴様達が殺した亡き戦友の弔いとして貴様を殺す」

ブウオオオオオオオ！！

雄たけびと共に突っ込んでくるデイスオーク！唯一の武器であるナイフのようなものを構える。

周りはオークに囲まれていて逃げることは不可能、なら近づく！

俺のナイフをディスオークの胸に突き立てるがディスオークの剣は俺の体を貫いていた。

体から力が抜けていく・・・

とてもここは寒い・・・

体のそこから凍えていくようだ・・・

・・・おいおい、まだ敵は生きてるんだぞ？もう終わるか？

だって俺、剣で刺されたんだから、死んだんじゃないのか？

俺様の体があんな鈍らで斬られた程度で死ぬ体なわけないだろ？

ちっ！しゃーねーなー！お前に自分の体の使い方を見せてやるよ・
・ちゃんと《見て》るんだぜ！

「貴様如きでは傷もつけれんと思ったが、俺にナイフを突き立てるとはなだがこの程度かすり傷でしかないわ」

デイスオークが笑う、周りのオークたちもそれにつられて笑う

「そうか、ならば二回戦を始めようか」

剣で貫かれたはずの体から紡がれた声にすべてのオーク達から驚きを隠せなかった。

「馬鹿な・・・俺は貴様を貫き確かに殺したはず・・・」

「そうだな、確かに貴様は体を貫いた」

「ならばなぜ貴様が生きている」

「体を貫いた程度で俺が死ぬと思ってるのか？」

カカカと笑う、この異様にはこの部屋にいるすべての生き物が恐怖した。

「貫いて死なぬのならば！粉々に砕いてくれる！」

デイスオークが剣抜き走っていく

「これで砕け散れええ！ 剛腕爆砕」

爆音とともに周囲に砂煙が立ち込めるデイスオークの剣は床に大きなクレーターを残す

周りを囲んだすべてのオークがデイスオークの勝利を確信した今度こそあの人間は粉々になったと

砂煙がおさまっていくとうつすらとデイスオークの姿が見え出した
剣を振り下ろした姿のままデイスオークは動かない。

「当たらなければどれだけ威力があっても無いのと変わらないのだぞ？」

砂煙がおさまった後オークたちが見たのは素手で体を貫かれたデイスオークと鱗に覆われた尻尾と額から1本の角を生やし鎧のような鱗を纏った『レオ』の姿だった。

「本調子ではないがちょうどいいデイスオーク貴様を喰らって我の魔力としてやろう」

デイスオークの姿が一瞬揺らぐと『レオ』の中へ吸い込まれていった。

「オーク程度では腹の足しにもならんな・・・ああ、安心しろ貴様ら、すぐに同じところに送ってやろう」

レオは一番近いオークに近づくと半分に引き裂いた

それを見たオークたちは我先と開いている扉へ走っていく、しかし通路は開いていて向こう側が見えているのにまるで壁でもあるかのように進むことができない。

レオはゆっくりと一番近いものから順に肉塊へ変えていった。

一面オークの屍骸で埋め尽くされた部屋で嗤う一匹の異形

数時間後にやってきたほかのPTは足の踏み場が無いほどに捨てられて
いるオークの死体を見てまるで地獄のようだとつぶやいたとい
う。

森の中

「ここは・・・町の近くかな？」

・・・おう目覚めたか！・・・

「だれ？」

・・・俺だ、レオだ！・・・

あれは夢じゃなかったのか・

・・・どーだ、人間の限界とやらは味わえたか？・・・

人間のつていうか今の俺の限界だけどね

・・・安心しな、お前にもう限界は無い・・・

限界は無いって寿命とか向き不向きとか人には越えられない壁とかあるじゃないか

・・・ナナシ今の見た目こそ人のなりをしているが今のお前はれっきとした人外だ・・・

たしかにエロスは人一倍好きであの手この手を使っていたらいつの間にかエロスの人外ってあだ名がついてたけどそれでもやっぱり人間だよ！！

・・・ナナシ、そういうことではない嘘だと思っのであればそのらの木を殴ってみよ・・・

木？これすつごく立派な木だよ？俺が三人いてようやく囲めるくらい、どこぞの御神木とかじゃないよね

・・・そこいらに生えてる木だ気にせず殴れ・・・

結果：木を貫通しました。

・・・というわけだ・・・

木が倒れるんじゃないやなくて貫くなんてどんな力してんだ俺。

……貴様はこの世界に来たときからこの力は持っておったが、
大きすぎる力は貴様の身も滅ぼすと思い、我が抑えておったのじゃ
が……

抑えてたのに？

……オークと戦ってる時に面倒になってな（笑）我もおるし何かあれば起こってから何とかすればよいだろうと思ってる……
面倒って、そういえばオークと戦ってた時の姿は？

……本来の私の姿が人の形を取ったものだ……

そっか、さて町でこの姿だったら不審者だよな

今現在の装備はこんな感じ

ぼろぎれに近い服胸の辺りに大きな穴

ズボンはホットパンツに近い

極め付けに全身が人間の血とオークの血でパリパリになっている

……このままでは無理だな、そういえば向こうに川があった
な……

いや血を落としてもズボンの替えなんて買っていないし

バッグはレオが回収してくれていたようだ

・・・今の貴様なら自分の魔力を変換して服程度簡単につくれるであろう？・・・

俺そんな便利なことできるの？

・・・本来のイーツとなったナナシにできぬことなどほとんどないわ・・・

ほとんどって・・・ん？イーツってなにさ？

・・・イーツとはこの世界で勇者と魔王が神の意思をはずれ世界に歪みが出た時に現われるという存在だな・・・

そのイーツとやらはその世界で何すんの？

・・・今の勇者は魔王を倒さず世代交代したとか聞いたことがあるな今は3代目だったか、そして魔王は魔王で魔物を増やし世界征服を狙っており、通常であれば勇者が魔王を倒すもしくは負けるなどしてサイクルが回るはずだったのだが倒さないことによつてサイクルが滞りおぬしもみただろう先ほどのデイスオークのような例外が多発するようになるのだ・・・

じゃあ勇者に魔王に挑戦させればいいのか

・・・何の為にイーツにこのような力があると思ってるのだ？貴

様は勇者と魔王を倒して世界を征服する神となるのだ・・・

なるのだ！じゃないよ世界征服するなら魔王でいいじゃないか

・・・今の魔王にそこまでの力はないせいぜい村を息一つで焼き
尽くす程度だ・・・

魔王こわっ！それでよわいの！？

・・・全盛期なら吐息で町4つは簡単だったな、とにかくナナシ
は世界を征服してついでに神を殺っちゃえばそれでいい・・・

神様の殺害を殺っちゃえって軽くないか？

・・・まあこの世界の神は概念だけであって意思などないからな・
・

と話をしている間に川についたな

流れも緩やかだしもぐってみるか魚が取れたらいいな

・・・そつと掴むんだぞ今のお前は粉々に砕きかねないからな・
・

お、おう

そーつと・・・

そーつと・・・・・・・・

ここだあ！

・・・・・・・・ここだあ！じゃないほらみてみる見事に魚の跡形も無いぞ、
今なら魚の動きが簡単に追えるだろうに・・・・・・・・

人の子の感覚でやつちゃうんだ

・・・・・・・・こんなことでは女性の手もおちおち握れぬな・・・・・・・・

うおおお！ソフトに！やわからかに！相手を傷つぬよう我が手は栄光
を掴み取る！

・・・・・・・・わざわざ無駄に魔力を使って時を止めて魚を掴むでない・・
・・

ご飯ゲットー！生・・・・は怖いから火を起こさないと
荷物から火打石を出そうとしたところで

・・・・・・・・火もだせぬ男など女性は歯牙にもかけぬであろうな・・・・・・・・

はあああああ！俺の魔力よ！炎なつて燃え上がれええええ！バアー
ニイーンゲ！

何も起きなかった。叫んだ俺の声はむなしく轟いた。少し恥ずかし
かった。

・・・・・・・・そういえば、ナナシには魔法の使い方の説明をしてなかつ
たな、ナナシの場合だと、【対象】【現象】【時間】さえ頭の中で

イメージできれば魔力の方が勝手に行ってくれるだろう……

ではもう一度、《魔力よ！燃え上がれ！バーニング！》

空高くまで炎の柱ができました。

……魔力の伝達率がよすぎるせいか……

その後服を作りコニード亭へ帰ってきた俺はとりあえず布団へダイブして意識を手放した。

その3 戦闘開始 (後書き)

主人公チート始まります

きつとここまでがチュートリアルなんだろう。

その4、誰でも最初はたたかう一択（前書き）

構成が甘すぎて物語が迷子

前はダンジョンへーこんなはずではーセカンドチャンス！は逃さないっ！

その翌日のお話から始まります

その4　誰でも最初はたたかう一択

「んー！いい朝だ！」

・・・ふむ心地よい朝日だな！・・・

レオの声が聞こえる・・・やはり昨日の事は夢でもなんでもなかったようだ。

そういえばこんな時の為の歌があつたな・・・らうらう言葉にでない♪

現実逃避しても何も変わらないのでギルドに行つて昨日のクエストの報酬をもらいに行こう、あのクソ貴族がきつと報告を終わらせてるだろうから最悪死亡届けの撤回が必要となるかもしれない。

ギルドの入り口に立つと中から怒鳴り声が聞こえてきた

「おい！貴様！受付の分際で俺様を馬鹿にしているのか！同じことを何度も言わせるな！残り二名は死んでもうこの世にいない！さつさと報酬をよこせ！」

おつと聞き覚えのある声が聞こえて・・・相変わらず不快感がうなぎ上りするお声ですね。

「ですがナナシ様のギルドカードはまだ起動しておりまだ生存状態となっております、よってギルドとしてはクエストの報告を受け付けることはできませんー」

***基本的にギルドは冒険者を縛る規則などはないのだが初心者をいきなり無理なクエストへ放り出すこともできないので最低限の

ルールが存在する、その中の一つにクエスト受注者Aが初心者BをPTとしてクエスト受けクエスト報告の際にAのみで報告することはできない、ただしBが生存している場合に限るというものがある

「そんなはずはない！バルガスが死んでいるのにあの初心者が生きているわけが無いだろう！ちゃんと調べる使えないクズが！」

あの馬鹿の頭がぱーんってならないかな・・・

昨日のすばらしいバストのおねーさんに向かって使えないクズとはあの胸はすでに凶器といっても過言ではない！現にほら入り口に立ってたはずの俺はフラフラといつのまにかカウンターにまで足を進めてしまっているではないか。

あれは一種の魅了だよな、恐るべし。

「き、貴様！？」

おっと、おねーさんの魅了に負けてカウンターにやってきた俺に馬鹿が気付いたようだ。

「ああ、悪いな死んでなくて、というわけでおねーさんは悪くないしクズでもない、クエスト報告いいかな？」

そういえばさっきまで口調がのびのびじゃなかった気がする、おねーさんもこんな奴相手だとむかついたりするんだろうか

「はいー報告はー終了ですーナナシさんはーEレベルーおめでとーございますーこれでーいちおーいっぱんレベルのー冒険者レベルとーなりますーそれとー先ほどはーありがとーございましたー」

会話に割り込んだ際に実は馬鹿が剣を抜こうとしていて気付かれなように腕つかんで止めていたのだがどうやら気付いていたようだ。

「でもー女性とはなすときはー目をみてくださいねー」

こちらがどこを見ていたかも御存知でした。

「おい、ここにもう用は無い！おい行くぞー！」

クソ貴族様が去って行く、付き人はレイリアさんの他にフードを被り、ジャラジャラと鎖に繋がれた人だったが慌ててがこける。

「おい！とろとろするな！さつさについてこい！」

・・・胸糞悪くなるな・・・

手足を鎖に繋がれた人がそんなに早く歩けるわけが無い・

「おい、くsレイナルドさん」

いきなり猫がはがれるとこだった。

「なんだ庶民！この俺様にまだ何かあるのか！」

こけた人に手を差し伸べながらクソ貴族に話しかける

「この人なんで手足を鎖で繋がれてるのは知らないけどあんたみたいに早く歩けない事くらいわかるだろ、鎖を解くか、ゆっくり歩かしたらどうだ」

「ふん！奴隷をどう使おうか俺様の勝手であろう？それにその女は獣人なのだぞ鎖に繋がれているのがお似合いの下級民族ではないか！」

クソ貴族は近づいてくると奴隷のフードをとった・・・

そこにいたのは金髪に獣耳をつけた褐色肌の獣人で昨日広場で会ったイスカだった。

「バルガスが死んだ代用品になりそうな奴隷を見繕っていたら昔、俺様に齒向かってきた獣人がいてなその時慰謝料代わりにこの娘を俺様の奴隷としたのだ！まあ齒向かった獣人は切り殺してやったのだがな！ははは！」

我が物顔でベラベラと話す馬鹿

逆に俺は冷めていった・・・どこまでも

「だまれよ馬鹿貴族」

イスカの鎖を千切って馬鹿の足元へ投げる。

「貴様！自分が何をしているかわかっているのか！俺は貴族で貴様は一般の冒険者！その一般の冒険者ごときが貴族である俺の物に手をだすということを！」

「悪いな、俺は自分の好きなように、やりたいようにやるだけだ！」

・・・ははは！いいなあ、それでこそ俺のナナシだ！・・・

顔を赤くしていた馬鹿にレイリアさんが何かを伝える。

「勘違いしているようだが奴隷の契約はすでに終わっている！闇神：ディムルアの力を用いて装着者を主人の意のままに従わせる 従属の首輪 !その首輪がその獣人の首に着いているのがその証拠だ！」

「こんなもの壊してしまえばいい」

「闇神：ディムルアの力の宿りしアイテムがそう簡単に破壊できるものか！それを破壊しようとした者が闇に包まれて消滅したという話もあるがそれでも試すか？いいだろう首輪が破壊できればその奴隷を貴様にやろう、まあ無理だろうがなあ！ハハハハ！」

何がそんなに面白いのか高笑いする馬鹿を無視してイスカに話しかける。

「イスカ・・・もしかしたら失敗して一緒に闇に飲まれちゃうかもしれないけれど挑戦してもいいかい？」

「・・・あいつの言いなりになるくらいなら死んだほうがマシ」

「OK」

首輪を千切ろうと力を込める、とたんに全身に痛みが走る！

「ぐッ・・・」

—— 汝、己の過ちを認めぬ気か ——

レオと話すように頭の中に声が響く・・・

イスカはぶつかっただけで奴隷にされたんだ、下級民族だからと罵られて

——我、汝を障害と認定、排除する——

イスカの首輪より黒い触手のようなものが俺の体を締め上げていく
・・・この程度か！、我を内包せしナナシを傷つけるなら全力でか
かって来い！・・・

「ああああああ」

首輪に亀裂が入る

「そんな馬鹿な！《服従の首輪》にヒビ！？まさか！そんなこと聞いたことも無いぞ！」

レイナルドは首輪を外そうとして消えていった愚か者を何人も知っているだからこそ闇に包まれて消えた愚か者と一縷の希望を失った愚か者という結末が当然待っているものと思っていた。

——馬鹿な！私の攻撃がまったく効果を成さぬだと！？このようなことはあつてはならぬ——

・・・認めぬか、ならば認めさせてやろう！これが我らよ！・・・

「砕けろおお！」

首輪が砕けるとあたりに光の粒が舞っていた。

「馬鹿な、嘘だ・・・」

ぶつぶつとつぶやき続けるレイナルド、まわりでみていた冒険者や町の人々もこの結果を予想できた人間はいなかったようだ。

イス力は「ありがとう、ありがとう・・・」と泣いている、その頭を撫でながら

やっぱり獣耳と尻尾はいいものだ・・・とナナシは呟いた。

夜になってようやく宿に戻って来ることができた。

首輪を壊した後、レイナルドはレイリアさんに連れられて屋敷へと帰っていった。

この国の権力は内包する魔力に比例するものであり、これまで町の人々は貴族の一方的な理不尽にも耐えるしかなかった。

それを一般人であるナナシがイス力を助ける事によって初めて貴族

に「反抗」したのである。

これを見ていた町の人々は大いに喜び今の今まで広場でこれを食べなあれを飲みなというもてなしを受けたのだった。

イスカはいろんな人からお酒を振舞われて酔いつぶれて宴の終わりまでずっと俺の膝を枕にして眠っていた奴隷から解放された事が伝わったイスカの両親が眠っているイスカを見て「娘を頼みます」と言ってきた時には焦った。

・・・ナナシ、良き宴だったの・・・

ああ、楽しかったな

そんな時ドアがノックされた。

「開いてますから、どうぞ」

おっと、これまで誰も来るはずがないと思っていた分警戒してなかったけど部屋の中でレオと話しているのを聞かれたら独り言を言ってる怪しい人扱いじゃないか！

ドアを開けて入ってきたのは、イスカだった

「あ、あの！きよ、今日は本当にあるがとうございまひた！」

真っ赤になってカミカミな台詞で頭を下げる獣娘・・・イイネツ！じゃなかった。

「俺はしたい事をしたただだよ、それに感謝の言葉は昼間たくさん聞いたよ」

「あの、それで・・・ですね・・・」

なにか言いたそうにもじもじしている彼女に椅子に座ってもらい俺はベッドに腰掛けた。

彼女の顔は火が出そうなくらい真っ赤になって下を向いている。

ふむ、何か伝えたいことがあるようなんだが何を伝えたいのだろう。

・・・ナナシ、このメスの様子を見て何をしに来たのかわからぬのか？・・・

「顔を真っ赤にしてもじもじしている獣娘ってかわいいよね」（何かを伝えに来たというのはわかる）

「ひう！？」

イスカから変な声が漏れてこちらをずっと見ている・・・少し潤んだ上目遣いで

ん？もしかして漏れてた？

・・・ああ漏れていたな・・・

「あの・・・私を貴方のモノでいいので連れて行ってください！」

「あー、俺のモノって？」

「貴方の奴隷という事です」

イスカが手渡してきたものは昼間壊した首輪と似た物だった。

・・・獣人族が自ら自分をもらってくれと言っか・・・

「イスカ」

「はい」

「ダメだ」

「どうしてですか!？」

「俺は君に自由に生きて欲しかったから首輪を壊したんだ、なのに君は自分から首輪をつけてくれという」

「私は一度奴隷としてあの貴族に飼われました、獣人族は誇りを重視する種族なんです、ですが魔力は弱く襲われて奴隷にされて戦闘の盾にされたり慰みものにされることも珍しくないんです。」

「だから俺に君を飼えと・・・」

「ナナシ様は私を助けてくださいました!広場で会った時にナナシ様は私の耳や尻尾、首輪を見たうえで私に話しかけてくださいました、アレがなければ私は舌を噛み切って死んでいたかもしれませんが、なんでもします!食事の用意も戦闘だって!それに・・・ナナシ様が望むのであれば夜の相手であつても!ですから私に首輪をつけてください!」

従属の首輪は2重にかけることはできないらしくナナシにつけても
らえばいやな貴族に襲われることもなくなると考えたらしい

さてどうしたものかな?レオ

・・・今ナナシに足りぬものはこの世界に対する知識、この娘を連れて行っても問題は無かるう？それにお前はこの娘が嫌いなわけではないであろう？ならば何を迷う？・・・

いや、この子に首輪をつけて縛りたくないっていうのと奴隷っていうモノになじみがなくて

・・・ふっそんなことであつたか、首輪の方は我が何とかしてやるう・・・

レオと話し合いイスカと向き合う

「イスカ・・・本当に俺でいいんだな？」

「はい！」

「わかったその気持ちうれしく思う、だが俺は君を首輪で縛りたくないんだ」

「でも、それだと・・・」

「だから君自身に俺のモノだつていう紋章を刻み込む」

「でもそんな魔法聞いたことがありません」

「ああ、だから俺に任せて欲しい、いいかなイスカ？」

「はい、私はすでに貴方のモノですから」

イスカがふんわりと笑った、その笑顔はこれまでの彼女のどの表情より美しく、可愛らしかった。

レオが提案した従属の首輪対策は従属の首輪に組み込まれているデイルアの魔法をイスカの体に刻印として刻むものだった。

心の臓に近ければその効果も大きくなるというので月明かりだけが照らす部屋の中でイスカは上半身をあらわにした。

彼女の金の髪が月明かりの中美しく輝き、豊満ではないがメリハリのあるボディラインと形のよい胸にナナシは息を呑む。

「で、では刻むぞ」

ナナシがイスカの胸にキスをすると思議な模様が浮かんだ。

・・・これで首輪の魔法でこの娘は操れんよ・・・

「これで大丈夫だ・・・」

よと続けたかったがイスカに唇でふさがれてしまつて最後まで告げることができなかった。

「これからどうぞよろしくおねがいしましゅ！」

夜はまだ長い、このままイスカを押し倒してしまおう！そうしよう！

・・・我は何もみておらんし、利いておらん・・・

夜の闇が支配する部屋の中、月明かりというスポットライト、二つの影が再び近づき・・・

重なる。

後日、獣人族にとって首輪は婚約指輪のようなものと教わりイスカと二人で首輪を買いに行った

その4ゝ誰でも最初はたたかう一択ゝ（後書き）

ようやくヒロイン登場！

全部書き終わってから自分で読み返すことを楽しみにしている筆者です

マイリストに入れてくださっている方がいてびっくりしました。
のんびりマイペースで投稿して行こうと思います

私の下手な小説でも読んでくださった方ありがとうございます。

少し変更しました！

その5〜時には逃げることも戦術〜（前書き）

前回は！

報告に行こう！↓貴族様コンチャー！↓首輪なんぞしてんじゃねえ！
ということの続き

その5ゝ時には逃げることも戦術ゝ

コンニチハ！ナナシです！現在ベッドの上で右腕に認めたくない重さとやわらかさがあります！

右腕を枕にして眠る美少女獣人のイスカ、ここでもし俺がタバコをくわえていたら・・・バードボイルド事後です！きつとメリルさんにも「昨夜はお楽しみでしたね」って言われる！

まあまあ俺！落ち着いて、れれれ冷静になれ！

「んっ」

ワーニン！わーにん！カカシ隊長殿報告いたします！イスカ's美乳が我が腕に押し付けられてトランスフォームしております！

・・・カカシ・・・

レオ殿！現状を打破する画期的な方h・・・

・・・くくくっ！煩惱にまみれた我が半身よ！理性のストックは十分か！？・・・

という問答をしているとパツとイスカの眼が開く、琥珀色の瞳がこちらを見つめている。

「えっと・・・おはようございます」

恥じらう顔がまたかわいい！

クリーンヒットオ！理性が砕けちったあ！そんな声が聞こえた

10分ほどイス力をぎゅっと抱きしめる

うむ！やわらかい！いい匂い！これはもう手放せない！

そんなことがあって少し遅めの朝食を取っていると銀の鎧を来た集団が入ってきて女将さんと何か話す少し困ったような顔をした女将さんが俺の方を指差す。

「我らは銀翼の守護騎士団副団長ヴリニア＝リーデルトである！ナナシという冒険者がこの宿に在るとの情報を得て参上した、ナナシというのはお前か？」

おや？何か雲行きが怪しい気がする。

「確かにナナシは自分の名ですがどうかしましたか？」

「堂々としたものだな自分の行いを考えればなぜ守護騎士団が来たかも予想できるのではないか？」

何かしたかな？まずこの世界に来てから騎士なんていう知り合いを作った覚えも無いんだが

「思い当たる節があるようだな一緒に来てもらおうか！」

手を縛られて連行される

イスカも同じように手を縛られているようだ

「どこへでも着いて行きますよ」

ピコピコと耳が揺れる、癒されるなあ・・・

「ナナシの奴隷か、一緒に連れて行け」

表に止まっていた馬車に乗せられると馬車はすぐに出発した

「えっとこの馬車はいつたいどこに向かっているのでしょうか？」

「守護騎士団本部のある王都ベルリアに決まっているではないか」

王都って事は首都みたいなものか、でっぷりして白いひげをたっぷり生やした王様が宝石のついた杖とか持って長いマントを引きずって歩いてる絵を頭の中に思い描く

イスカはナナシの隣にぴったりとくっついていた。

御者台で馬を操っていた兵士の一人が悲鳴を上げて『燃える』

「敵襲！総員戦闘準備！」

今の位置からだ敵の姿は見えない、魔法を使ってくるのであれば必要な詠唱こえがあるはずだがさっきの魔法には詠唱こえは無かった、ということは・・・魔法ではないのか？

・・・修練を重ねた魔法使いならば無詠唱でも魔法を使うことがで

きるのだぞ・・・

そうだったのか

隣にいたイスカにとってこのような争いごとは苦手なのであるう耳を伏せて身を抱きしめている

仕方ないイスカのためにもこの襲撃を止めに行くかな

「イスカ、少し待っててすぐに終わらせてくるから」

イスカの頭を2回ほど撫でると馬車から降りた。

あたりの地面には赤より黒に近い大輪の華が咲き乱れ倒れた兵士や襲ってきた者が無数に目に入ってきた

OK！OK！落ち着けスプラッタやホラーは映画でそれなりに見えてきたじゃないか！吐きそうだが吐くのは後だ、イスカのためにもとりあえずこの騒ぎを止める

レオ、動きを止めるのに適した魔法ってないのか？

・・・無いわけではないが相手を視覚がとらえる必要がある、それよりも相手の死なない程度に痛めつけて動きを封じる方が手っ取り早いぞ・・・

なら電気を使つて麻痺させるか

ー我が魔力よー

「なんだこの魔力は!？」

「我に害する敵を貫け！

「いかん！総員防御体勢を取れ！」

疾走する雷

「横に・・・落ちる雷だと・・・！？」

おや、自分の敵だけ当たるかと思ったけど騎士の方々にもあたってるねえ

やっばい、副団長さんすっごい見てる

カカシの魔法の範囲外にいた兵士の皆さんに手伝ってもらい盗賊の確保としびれて動けない騎士の方々を運んでもらった。

動けるようになった副団長さんに「貴様の魔法は危険すぎる」といわれ現在猿轡をかまされてます

「むーむー」

何かを話したいわけではないのですが猿轡をかまされるとムームー言ってみたくになります。

「えっとナナシ様が何か言ってるけどわからないです」

隣で困ってるイスカを困らせてしまったのでポンポンと頭に手を載せてなんでもないとジェスチャーで伝えるさて暫く静かにしているのか。

・・・ナナシが騎士団なんぞに捕まる必要など皆無なのだから蹴散らしてしまえばよかるう？人が相手ではやりにくいというのであれ

ば我が代わりにやつてもよいぞ・・・

いや、特に暴れる必要もなさそうだとおもう、イスカや俺に危害を加えそうになったら反撃はするけどこっちから手を出す必要は無いよ、お尋ね者になって追い掛け回されるのもごめんだしね

半日ほどかけて王都ベルリアへ到着した俺達は城へ到着したのだった。

王都ベルリア：初代ベルリア王により建国され魔王軍との戦も減っているとはいえ魔王領に近いこの国では年に一度武術大会が開催されることでも知られていた。

縛られたまましばらくここで待てと言われて暫く周りの様子を眺めながら自分の連行された理由を探していた。

王様が来てからは早かった・・・王様は玉座に座ると

「お前達には武術大会に出てもらうそれまでは客間にて滞在するが
いい」

「あの武術大会になんて出る気無いんですが」

「余はおぬしに発言の権利を与えた覚えは無い」

拒否権無しですか・・・近くにいた兵士がもつと敬わんかと言っていた気がするが無視でいいだろう

で

王のおっしゃった客間はベランダはあるが結界が張ってあるよう得手すりから外に手を出すことができない仕様で扉の前には護衛という名目で常時二人以上の兵士がついていた。

城の中は歩き回ってもかまわないと許可はもらっていたがこれも見張りがつくこととなっている

「武術大会に出す為にわざわざ俺を呼んで来た理由はなんだろうな
武術大会って言うからには武術をきそうんだろうけど俺は武術なんて知らないしなあ」

「えっ？そうなんですか？」

おや？イスカの前で武器の類をもったことも喧嘩した覚えも無いんだがなぜそんなに驚いているんだろうか？

「ナナシさんは私の首輪を引きちぎるほどの魔力を持っていたので当然相当な地位にいるお方で剣なども使えるものだと思っていました」

この世界では魔力量が高ければそれなりの地位に多いつまり魔力量が多い＝貴族のようなお偉いさんという式が出来上がっていたわけだ。

そして貴族達の間ではほぼ同じ魔力量を持つ場合武術によって階級が分かれることもあるため地位が高くなればなるほど武術も使えるという事がいえるわけである。

ただし魔力量が桁違いに多い王族や一部の魔法使いは魔法に特化し武術が使えない……いや使う必要がないらしい

見張りの兵士に聞いたところ試合は降参するか相手が気絶するまで続くそうだ。

「仕方ないな、一試合目で降参して帰らせてもらおうかな」

やることも無いのでイスカの髪や尻尾をブラッシングしつつそんなことを言っていると

「邪魔するわよ」

ドレスに身を包んだ美少女登場！歳は17くらいで手入れの行き届いた金髪が腰辺りまで伸びている

「これが今回の挑戦者？これまでと比べると頼りない感じねえ」

「あんたは誰で何のようだ？」

「え？私の事知らないの？・・・ホントに？さっきお父様と一緒にあつたのに？」

この突然現れた美少女さんはびっくりしたようにそんなことを言っていた、当然俺はこの間もイスカのブラッシングをしていたのだが

「私の名前はフィルネシア、フィルネシア＝ベルリア！第2王女よ」

「そっか、で用件は？」

「えっと、私は第2王女なの・・・よ？」

このような対応されたことが無いのだろう急にオロオロしだす王女様、ブラッシングが終わったので王女様に向き合ってイスカにやるように頭をポンポンと撫でながら

「そうだな、フィルネシアはえらいねー」

「そうなの！フィルは偉いの！ってそうじゃない！」

おー王族もノリツツコミってするんだな

「貴方が今度の武術大会に出るって言うてきた凄腕の冒険者なんですよ？」

「いや、朝のおいしいご飯中に拉致された一般庶民だ」

「くっお父様、嘘の情報を流したわね」

何でも次の武術大会で優勝した相手と婚約を取り決めるという今回は庶民からの参加者もいて庶民が優勝した場合婚約を破棄してもよいと約束をしたらしい

「へー、優勝候補ってどんなやつなの？」

「キリアン公爵家のダリル」キリアンよ、武術と魔法の腕はこの王国一だって聞いているわ、ただかなりの自己陶醉者でおまけにミシエル」キリアンにべったりなのよ！」

「ミシエル」キリアンってのは？」

「ダリルの母親よ」

ナルシストのマザコンとは・・・このお嬢さんも大変だな

「まあ頑張れや！」

・・・ナナシ、お主は鬼か・・・

「え！？なんでよ！ここまで聞いたんだから普通なら貴方のために優勝をささげますってなるところでしょ！？」

「ははは、馬鹿も休み休み言えよ？優勝しても俺にはなんのメリットも無い上に俺はいきなり連行された身だ、一回戦が始まると同時にリタイアするんだよ」

「メリット？リタイア？」

「意味は利点と降参だな」

「なんでよー」

軽く涙目になってるフィルネシアはかなりかわいかった・・・

「失礼しますよ！」

おっと客のよく来る日だな

「おや？フィルネシア王女いつもお美しい！このような場所では会えるとは恐悦至極にございます」

ダリルはフィルネシアの手にキスをする

「ダリル公爵ここへは私に挨拶に参られたのですか？」

「おお！そうでした、初めまして！私はダリル「キリアン」と申します！真紅の騎士の二つ名を持っております、貴方が庶民から武術大会に出るといふ奇特な冒険者ですか？対戦時にはせいぜい頑張つて私の美しい勝利の礎となれることを誇りにおもугがいい！」

今気がついたとばかりにオーバーリアクションを取るダリル公爵、顔立ちは整つてゐるしさらさらの金髪体つきは赤い鎧を着ているのでわからないがフィルネシアの腕に鳥肌が立っているのが見えるイスカも怖がつておれの後ろに隠れている

よつぽど苦手なんだな。

「これはこれは、ダリル公爵様こんな私のためにこんなところまで来ていただけるとは貴方の噂はかねがねより聞かせていただいております、私などでは貴方様とお話するなどとても耐えることができませんぬどうかとつとお帰りやがってくださいませ」

ばつちり営業スマイルつきだぜ？

・・・うむ、ダリルとやら青筋が浮かんでおるな・・・

「貴様いい覚悟だ！当日は八つ裂きにしてオークどもの餌にしてやるから覚悟しろよ」

「楽しみに待つててやるよ！ほらさつさと帰れよお家でママが待つてるんだろ？」

「失礼する！」

さて、勢いで喧嘩を売ってしまったがどうしたものか

「貴方、一回戦で負けるんじゃないやありませんでしたの？」

不思議そうな顔をするフィルネシア

「そのつもりだったんだ美人さんが嫌がってるのは無視はできないかな」

イスカとフィルネシアの頭をポンポンと撫でてふと思いつく

「なあ、一回戦の相手をあのナルシストにすることはできないか？」

王族ならそれくらいできそうだと思ったが

「残念ながら武術大会には王族といえど干渉することはできません
それに彼はアレでも前回優勝者なので準決勝までのシード権を持っております」

アレが前回チャンピオンとは世も末だな

「よく考えたらおれはあいつに当たらずに武術大会を去る事もできるのか」

「このまま戦わずに去るときつと貴方に暗殺者がつきますよ」

・・・ナナシ自体に暗殺者をつけても返り討ちに遭うだけなのだが
イスカを守りながらだと難しいと言わんが面倒だろうな・・・

「わかりました、ならば優勝すれば金貨20枚でいかがでしょう？」

お金が特に困ってるわけでもないんだがな

「いや別に金には困ってないから」

「なら・・・」

「だがな美人さんの頼みだからな優勝狙ってみるわ」

つくづく美人に弱い俺・・・そのうち美人局にもひっかかるんじゃないのか

「ありがとうございます、これから私の事はフィルと呼んでかまいません」

「わかった、フィル、ところで剣を売っている店はあるか？」

「ええ、城下にいくつかありますよ」

「なら明日は城下に行って武器探しだな」

「御自身の剣はありませんの？」

ずっとこれだったからとゴブリンの持っていたナイフのようなものを見せる

「こんなもので戦っておられたのですか・・・」

まあねと返すとフィルは兵に呼ばれて去っていった。

夕食は部屋に料理が運ばれてきたが奴隷用の食事は別に用意してありますといわれた時にそっちは結構ですと断って二人で運ばれてきた料理を食べた、まさか異世界に来てあーんが体験できるとは思わなかった。

この国には沐浴はあってもお風呂にはいる習慣は無いそうでお湯をもらって体を拭いた、そのうちお風呂に入ろうと固く誓う

その夜、奴隷にはベッドは与えられず床で眠るのが普通だそうだが俺はイスカと契約してから必ず床ではなくベッドに寝かせるようにしていた。

いつもは別々のベットなのだが今日は同じベッドで眠ることになった。

朝というものは必ずやってくるものだ、とりあえず目の前で幸せそうに眠る獣娘を抱きしめてから布団から出て顔を洗おうかと考えていると扉が勢いよく開く

「ナナシ！入りますよ！」

ノックという礼儀は無いのね

扉を豪快に開けて入ってきたのはフィルだったが、開けたポーズのまま固まっている。

「どうかしたか？」

「あの、差し支えなければ教えていただきたいのですが、貴方達の

関係は奴隷と主ですわよね？」

「いや？」

「でも彼女の首には《従属の首輪》がありましたわよ」

なるほど、イスカの首には首輪がついている、服従の首輪にそっくりな単なる首輪だったのだがフィルには服従の首輪に見えるのだろう

「あれは普通の首輪だ、だが他の奴等に取りられないように保険をかけてあるのさ」

「そ、そうでしたの、とりあえず服を着ていただけませんか？」

「おっとこれは失礼」

この世界に着てから眠る時は上半身は裸でズボンのみという格好だった。イスカにいたっては下は下着上は何も無しという格好で寝ている、イスカいわくこれが普通だそうだ

シャツの着て未だに眠り続けているイスカに布団をかけなおすとフィルの方へ振り向いた

「それで？何の用だ？」

「ナナシ貴方は少しは私を敬おうとは思わないのですか？」

もう仕方ないなあフィルさんは・・・（どこぞの青いタヌキの声っぽく）

「フィル、このような時間に貴方のような美しい方が私を訪問して

くださるとはとてもうれしく感じます。」

と少しタカ。ツカをイメージしつつオーバーリアクションをつけながら手を差し出してみる。

フィルはゆっくりとその手を取るだけで何も言っていなかった。

おや？何か言ってくるかと思ったのだが無反応か・・・ならばもう少し遊んでみようかな

「きゃっ」

その手を引きフィルを抱える

「フィル、貴方のきれいな目を見ていると思わず手が出てしまいました。」

アワアワするフィルこれはこれでかわいいな
さて仕上げだ

顎に手を添えて顔を近づけていく、フィルは目を閉じる。

目を閉じたところで鼻をつまんでやる

「ふにゃ！何するのよ！」

「寝ぼけているお姫様に目覚ましをしてやっただけだよ？で？用件はどうしたよ」

「あ、え、ん？あ、そう！剣のことよ！」

「俺の使う剣か？」

「そう！今日一緒に鍛冶屋まで行くわよ！」

百面相したあとにそういい残すと足早に去っていった。

鍛冶屋に行くならイス力を起こしておかないとな、イスカーおきろーあさーあさだよー朝ごはん食べて鍛冶屋に行くよー

「抱きしめてくれたら起きれる気がするー」

抱きしめるついでに頭をぐりぐりとなでてやる

朝食時はちゃんと二人分用意されたので朝食を取って鍛冶屋に行くのはいいがどこで待ち合わせるのだろうか？と考えていたらフィルの方から来てくれた。

「さあ！鍛冶屋にいくわよ！」

ワンピースを着てどこかの令嬢という感じに変装？しているフィル

「そんな・・・」

そんなに焦るなよって言おうとしたがここはからかう方向でいこうか

「フィル、その服とてもよく似合っているよ、今すぐその服を剥いでベッドに押し倒したいくらいだ」

「え？」

「冗談だ」

顔を真つ赤にしてうつむいたフィルを見てこういう冗談はなれてないんだなと実感する

「ナナシ・・・私ナナシになら押し倒されてもいい」

イスカはイスカで冗談が通じてなかった。

その5ゝ時には逃げることも戦術ゝ（後書き）

物語がほとんど進んでませんね。

次の回は鍛冶屋で剣を買いましょう！ええ！そうしましょう！

その6　忘れ物はないかい？（前書き）

鍛冶屋！冒険者には武器が必要ですよ！

今の今まで主人公に武器を持たせるって概念をすっかりしてたよ

武器屋のおじさんも言ってたじゃないか「武器は装備しないと意味無いぞ」って

その6　忘れ物はないかい？

さすがは王都の市場フューデイルの町の比じゃない見渡す限り人人！

・・・どこに何があるのかもわからんな・・・

イスカは俺の隣にぴったりくっついていてフィルは前を付き人の人と歩いているもちろん変装はしている他にもこっそりと護衛の方々がいるそうだ。

「ナナシよ！まずは鍛冶屋だったな！」

「ああ！場所わかるのか？」

「ここは私の庭なのよ？すべて把握してるわ！当然！」

それはちよくちよく城から抜け出して城下へ来てたつてことですよね・・・お付の人たちご苦労様です。

「ついたぞ！ここだ！」

ボルドー商会　鍛冶屋

看板にはそう書かれていた、猛烈にいやな予感がする。

「親方ーいないのー？」

フィルはこっちの気も知らないですでに店の中へ踏み込んだ瞬間ム

キムキな手に抱きかかえられる。

「ラッツシャーセー！おう！フィル嬢ちゃんじゃないか！今日はどうした？また兵士の剣でも折ったか？それともいたずらに使うトラバサミか？そういえばこないだ言ってた冒険者から良質な鉱石が手に入ってた今なら伝説の勇者の剣にも負けない一品ができそうだぜ！」

・
ボルドー商会に入る条件にマシンガン Took って入ってるのかな・

「そうじゃなくって今日はこっちのナナシに剣を一本欲しくて」

フィルを降ろすところへやってきた

「おうちにーちゃん！今日は剣をご所望かい？ショート・グレート・レイピア何でもあるが希望はあるかい？」

おや、ここは向こうの商会と違ってまともなのか？

「片刃の剣ってありますか？」

「オーダー！片刃の剣」 「「「「片刃の剣よろこんでー！！」

！「「「「

前言撤回！一緒だ・・・よくみたらこの人の顔フューデイルでみた顔と一緒にんだが・・・分身？

「我らボルドー商会！」

くっ！また後ろか！

「いついかなる時でも」

「お客様の身の安全を考え」

「最高の輝きと切れ味を」

「お届けいたします！」

また避け切れませんでした。

よくみたらイスカは侍女の人があらかじめ避難させてる、GJ侍女の人！できれば俺も助けてほしかった

「しまった、ボルドーさんとこの終わっちまったか？」

「いや、まだ始まったばかりだ」

「俺これ終わったらパン屋のあの子に告白するんだ・
・・・おっといたずらな風が 羽ばたけ白き純白」

「「「みえ・・・ない・・・だと

っ
「「「

おいおいスカートめくりのために魔法を使うのか・・・

「それで！おにーさん既存の剣の内片刃はここにあるので全部です
がこの中から選びますか？それともオーダーメイドで作りますか？」

そうだな、とりあえず資金を見せてこの中から買えるやつを分けて
もらおうかな

「えっと今手持ちがこれくらいなんですがどれが買えます？」

財布をひっくり返す金貨や銀貨と一緒に赤と緑の石もでてくる

「お客さん！この石どこで手に入れたんだい！」

「おや、キレイな石だからお守り代わりに入れておいただけなんだが、単なる石じゃないのか？」

「えつとモンスター倒した後に落ちてたんですが」

「そんな簡単にこれが手に入るはずがねえこれは魔晶石っていつて魔力の塊みたいなものなんだ、剣や魔法をつかってもなかなか採取できないってんで市場に出回るのはまず無い貴重なものだ人生で一度お目にかかれたらいいってレベルの代物だぜ？」

「おや、ボルドーさんの様子が……」

「おめで

とう！ボルドーさんは燃える天災へ進化した！」

「久々にみたな結界の準備するぞ」

「！」「！」「！」「！」「！」「！」「！」

結界が必要になる展開って予想がつかないんだが。

「おうにーちゃんにーちゃんも武術大会に出るのか？」

「その予定なんだ、気がついたら出場が決定しててそっこ……」

「なら話が早い！これを使って俺に剣を作らせてくれないか！金は
 いらなない！俺のこの手が叫ぶんだ、この魔晶石を使って最高の剣を
 作れってなあ！」

熱い！リアルで熱い！なにこの熱量！？

「ああ、おっちゃんの体質でな興奮すると熱を出すんだ・・・奥さんの浮気騒動の時は辺り一面焦土と化した」

え？なにそれ天災レベル！？

「きつと！武術大会には間に合わせる！それまでこいつを使つてくれおおよその形はこれと似たような形になるはずだ！」

「えつと・・・お願いします」

「おつしゃ！！俺はボルドー商会鍛冶屋をやつてゐるバルドーつてんだ！よろしく頼むぜ！てめーら！集まれ！貴族どもくすてつの生ぬるい剣作つてゐる場合じゃねえぞ！これから俺が・・・」

すごい勢いで魔晶石もつて鉄火場に入つて行つたな

渡された剣を見る・・・赤っぽい刀身を持つ片刃の剣重さはそこそこ10キロくらいかな
ナイフよりかはマシか

「あれ？あの力カシさん、これ刃がついてないです」

いつのまにかイスカが横から剣を眺めていた。

だよね、これ遠目からみたら単なる剣なんだけど刃がついてないも
しかしてモンスターを叩き切る剣？

・・・これはめずらしい代物を持つてきたものだ・・・

レオこれ知ってるの？

・・・これは、魔力を使用して切る剣でな、剣に纏わせた魔力によって間合い、切れ味、をかえれると聞いたことがある。過去の戦場ではバーストフレアという魔法を剣に纏わせて相手の体に触れた瞬間に爆裂させて再生させないという使用法もあったのだぞ・・・

すごいものなんだな

・・・いや庶民はそれほどつかわんだけで魔力が潤沢にある貴族共にとつては手入れのいらん便利な道具だろうよ、ただしこれを使うにはそれなりの修練と想像力が必要で今はほとんど使われておらんがな・・・

「さっきのスカートめくり犯は貴方ね！」 「！！！！？？？な
ぜばれた！！！！！」

「乙女の勘・・・といたいけど魔力の残滓がべったりなのよ！」 「くっ！うかつ！！」

「女性の敵は速やかに滅びるべし！！滅びろ！乙女の業火！《バーストフレア》」

「こんなところで死んでたまるか！我は行かん！ハーレムという夢を得んがため！《疾駆・閃光》」

さつき戦場で使われるとか言われた魔法が目の前で使われています

・・・うむ、いつのまにか世界の戦場は一般家庭まで巻き込んでおつたのだな・・・

地面に開いた穴をせっせと埋めていく周りの人々これも日常なのだろうか。

さっきもらった剣を両手で振ってみる・・・周りを見回して・・・

片手で振ってみるさすがにぶれる、筋力足りてないね

・・・魔法の補助を使ってみろ、過去にはもっと重量のある武器もあったが魔法による軽量化により片手で使用した例がある・・・

そういえばこの剣は魔法を纏わせたりできる剣、ならばアレができるかもしれない。

「ナナシ、フィルが呼んでる」

「お、おう！すぐ行く」

イスカに呼ばれてフィルたちの下へ

昼食を何にしようかと話しながら歩いているとソースの焦げる匂いがする・・・

「こ、このにおいは！」

「どうしたの？」

「良いにおいね」

露天から漂ってきたにおいはまさしく好みソースの焦げる匂い！
露天をのぞくと中では肉にソースを塗って焼いていた。

「お、いらっしやい！5本で銅貨1枚だよ」

「え？」

「どうしたの？そんなにお肉食べたかったの？」

「故郷にこのたれによく似たものを使った料理があっただけこれとは違っただけだ」

一本もらったが味はソースそのものの悪くはないが、ソースなら好みやたこ焼きが食べたい、ここの生活は東洋というより西洋風なものが多いということはタコやいかを食べる食文化も無いんじゃないかな。

そう思ったら余計にたこ焼きが食べたくなってきた。

この町で武術大会を終えて魔王や勇者を何とかするよりもまず港町へ行こうと心に決める。

城で軟禁状態の俺達だがこうやって外出していいのだろうか見張りはいるとしても、そういうえば王様の様子は適当に過ごしておけというどうでもよさそうな感じだった、まさか俺たちを呼んだのはフィルだったりするのか？ダリルを優勝させたくないというなら俺よりもっと強い冒険者はいくらでもいたはずだ、Eなんてようやく一人前になった程度の実力がSやAのような高ランクより目にとまった理由が未だにわからない。

・・・首輪の件は貴族たちからしたらなんとしても隠したい事実だろうから報告するとも思えんからな、少し対策として今宵から夜

間に魔法の訓練をするか、今のままでは実践では使えんだろっからな・・・

肉をほおばり幸せそうな顔をしているイスカをみながらそんなことを考えていた、が次の瞬間にはイスカとフィルに引っ張られて祭りの喧騒の中へ紛れていった。

城に戻ってきた2人はフィルと分かれてナナシに与えられた部屋にいた。

「少し散歩に行つて来る」とイスカに言い残して部屋を出る目的地は裏庭である。

・・・ナナシお前の魔力は制御しなければ人を殺める恐れが十二分にある、よつてコントロールの訓練から始めようと思う、まずは魔力を手に集めよ手に収まるサイズでな・・・

こんなものか？

・・・魔力の量が多いわ！、これの10分の1でも使い方しだいでは人を殺せるわ！・・・

軽く出したつもりだったんだが軽く俺の顔より大きいな・・・

・・・魔力をコントロールするのはナナシ自身のイメージと精神力だ・・・

お！小さくなつた！

・・・ばか者！サイズだけ変えても意味が無いだろうが！もっと魔力を散らせ・・・

そんなやり取りを5時間ほど続けてある程度制御できる頃には月が頭上で冷たい光を放ち、城の中も見回りの蠟燭の光が見える程度になっていた。

部屋にもどったナナシがみたのはベットで丸くなっているイスカの姿であった。

待っていたけど疲れて寝ちゃったかな、イスカ今日のお祭り楽しそうだったからな。

そつと布団をかけてやり自分もベッドにもぐりこんだ。

・・・ナナシのやつまさかあのような方法で魔法をコントロールするとは我も魔法使いとしては異端とされたが我を宿すことで思っていた魔法か、これだからナナシは面白い・・・

翌朝、レオにただ剣を振っただけでは芸が無いと言われて、仕方なくギルド行くことにしました、イスカもギルドに登録しておくという目的もあったのでついです。

今回は見張りという名目で一人騎士をつけるならという条件でギルドで仕事を請ける許可を得ました、ただし数日かかるようなクエストはダメだとか。

その騎士様が来るのをこつこつと待ってるわけですが、来ませんねー

「イスカ、一日で終わるクエストをやってくるだけだから部屋で待つててもいいんだよ？」

「いいの、私はナナシと一緒にいる。」

「遅れて申し訳ありません！お久しぶりですナナシ様」

そういつて現れたのはゴブリンの巢から救出した人質ーズの一人ベルムンドさんだった。

彼は城の警護兵をしていたまに休暇がてらギルドからのクエストを受けていたという。

「この間は恥ずかしいところをお見せしました、あの時ナナシ様が来てくださらなければ今の私はありませんでした、本当にありがとうございます。」

「いえいえ、偶然あの巢を発見して探索してただけですので」

「ナナシ・・・」

「そちらはナナシ様の奴隷・・・ですか？」

急に俺の服をつかんだイスカにベルムンドさんが不思議そうな目を見る、普通奴隷が主人に心を許すことは無い。

「いや、俺の旅の仲間ですよ、こっちはベルムンドさん以前ちよつとしたことがあって知り合った人、でこっちはイスカ、奴隷にされてたのを開放しました。」

「奴隷を解放？金を渡して買い取ったではなくて？」

「細かい話は長くなるので省きますが買い取りではなく開放です、
ですのでイスカは奴隷ではなく俺の仲間です」

「それは失礼、無礼を申しました、イスカ様」

その場でベルムンドさんはイスカに対して謝罪する。

「え、ええつと・・・気にしてないです」

「そうそう、ベルムンドさん俺の方がどうみても年下だし敬語はおかしいんで様とか取っ払っちゃってください」

「いや、ですが私は今回王からの命を受けて護衛してますので」

「なら前回助けた礼ってことで敬語なくしてください、そういう対応になれてなくてさっきからむずむずするんですよ」

「わかりました」

そんなやり取りをしながらギルドの掲示板をのぞいて見る。
さて一日で終わるクエストでいいものは無いかなつと・・・

「そつえばクエストを受けるとおっしゃ・・・言っていましたかな
ナシはレベルいくつなんですか？」

「レベルEだよ」

「Eレベル!？」

ゴブリンを一匹相手するのは簡単だが巣を攻略するとなると複数のゴブリンを相手するとそのレベルはD-Cレベルとなるましてあそこの巣のゴブリンの親玉は魔法を一切受け付けず自分の剣でも切れなかった相手だ、ベルムンドのランクはCランクでそれ以上だと思っただけに驚きを隠せなかった。

「まあそんなにいそいでランクを上げる必要も無いと思ってるから旅しながらゆっくり上げていこうかと思ってるんだ」

「そうなんですか、お、これなんかどうですか？」

「魔法庁にて片付けの手伝いか、これなら一日で終わりそうだしコレにしますね」

「はい、ではこちらのクエストを受注ですね、御一人ですか？」

「いえ、ベルムンドとイスカの3人です、あとイスカは登録してないので登録したいんですけど」

「わかりました、ではこちらへ」

イスカの登録が済み魔法庁へ向かうと部屋いっぱい箱が積まれていた。

「いやー、君達がギルドから来た冒険者の人？私はウォルター、ウォルター」デビットだ、ここの所長を務めている。」

「ナナシです」「イスカ・・・です」「ベルムンドと申します」

「早速だけどとりあえず君達にはここの木箱を上回まで運んでもらいたい」

「わかりました」

木箱はおよそ50、結構な数がある、さくさくやっていかないと日没までに間に合わないかもしれない

「ん、これは結構重いですね、イスカさんは大丈夫ですか？」

「大丈夫・・・獣人族は人族ほど弱くないから」

へー、イスカの華奢な体つきしてるのにベルムンドさんが苦勞して持ち上げた木箱を片手で運んでいる、目を疑う光景だわ

「さてと、俺も運ぶかな・・・って重っ！」

イスカがひよいひよい持ち上げてるのみて自分も簡単だろうと思っただけどナニコレ超重い。

ギリギリ一個をよろよろ持ち上げる重さだ。

「仕方ない、こういうときこそ魔法だよな。」

昨日の特訓で覚えた魔法《強化》体に魔力を纏わせることにより体を強化する結構ポピュラーな魔法らしい。

体を強化した俺と何も使っていないイスカが木箱をどんどん運び思ってたより早く運び終えることができた。

お礼も兼ねて少し遅めの昼食をおごってくれるというので食堂で飯を食べていると

「所長！大変です、研究中の精霊獣が暴走しました！」

「なんだとっ、すぐに行く！」

「よかつたら手伝いましょうか？」

「助かる！こつちだ！」

そこにはトラのような獣が雷を放ちと豹のような獣が辺りを凍らせていた。

「あいつらはなるべく生かしたまま捕獲したい、できるか？」

「やってみます」

とはいったもののどうしたものかな

「イスカ、ベルムンドさん魔法は？」

「回復が・・・少し使える」

「ファイアボールぐらいしか使えない」

「イスカは支援、俺とベルムンドさんでアレを気絶させます」

「おう！」「・・・わかった」

ベルムンドさんが剣を抜き虎へ向かっていく、虎が迎撃しようと雷を打ち出す前に ノイズ で妨害する。

ノイズ : ナナシオリジナル魔法、ガラスを引つかく音に似た不快な音を大音量で聞かせる、ただし実際の音ではないため周りには聞こえない。

その間に豹に向けて 疾走する雷 を放つが氷壁によって阻まれる。

・・・守りながらではちがあかな、一氣に決めるナナシ・・・

強化 を目、手、足にかけて一氣に間合いを詰め氷壁を破壊しその奥にいた豹もまとめてなぎ倒す。

虎の方を見るとベルムンドさんが間合いを詰めれず苦戦していた。

「ずぶぬれ小僧が泣いている、雨に降られてないている！ 濡れ鼠の憂鬱」

濡れ鼠の憂鬱 : ナナシオリジナル、空気中の水分を集めて相手の体をずぶぬれ状態にする。

・・・ナナシ、お主詠唱センス無いな・・・

うるさい、次から無詠唱にしよう。

「はああ！」

虎へ鞘をたたきつけて虎が気絶する。

「いやー助かりました、ところでナナシさん今の魔法は？」

「昨日思いついた魔法なんですけど役に立ってよかったです」

言えない・・・透けたワイシャツってエロイよなって考えたらできた魔法だなんて。

「そうですか、このあとよかったら魔法庁恒例の祭りにナナシさんも参加してみませんか？」

「何するんですか？」

「みたらわかりますよ」

つれてこられたのは体育館ほどある大きな部屋でここの研究員と思われる人たちが2列に並んでいた。

「では、軽く準備体操してください」

ウォルター所長がそう言うと言と研究員の人たちが向き合い一方が魔法を打ち一方が魔法で防ぎ始めた。

「とまあこんな感じで魔力順列を決める大会でもあるんですよ、ルールは簡単攻撃側は捕縛魔法を打ち、それをもう一方が防ぐそれだけです」

「さっきの精霊獣との戦いを見てたらナナシ君のほかの魔法も見たくなってるね」

捕縛魔法か目の前でやってるのを見ると鎖のようなものが巻きついたり、足元が沼のようになっていたり多彩である

「それじゃあ本番行ってみようか、今回は趣向を変えてこのナナシ君を捕まえた人が一番って事で賞金1000Gだ！ナナシ君は捕ま

「らなかったら1000Gね」

「えっ!?!」

「場所はこの部屋のみ制限時間は10分間!それじゃあ始め!」

いきなりかよっ!研究員の人たちが走りながら詠唱してくる・・・
約20人ほど皆さん必死すぎて超怖い!。

「私も・・・ナナシ捕まえる」「なら私も参加いたしましょう」

さらに2名追加!?!??

強化 脳内チャット 発動!

脳内チャット : ナナシオリジナル、レオと会話することで思い
ついた魔法、意識のなかに複数の意識を存在させることで複数の魔
法を同時に使用することが可能となる。

光る鎖の対象を変え、突然できた沼を時間をとめることで回避、絡
み付いてきた草を焼き払って逃げる!

「やりますね!これならどうですか!狩人は獲物がかかるのをじつ
と待つ 捕食者の網」

所長さんは蜘蛛の巣のような光の網を作り出すかなり広範囲を対象
としているようだ。

「こうなったら逃げ切ってみせるっ!」

足にさらに魔力を込めて急加速して逃れる。

あるものは鎖に巻かれ、あるものは首まで沼につかり、ロープでつるされた者、粘着質な物質にとらえられた者がそこかしこにいる、ウォルター所長とナナシは向かい合っていた

「まさかここまでやるとは思いませんでしたよ」

「逃げるといった方には全力で逃げますよ」

「そろそろ私の魔力も限界なんでねこれが最後です！飽くなき探求の欲望よ！渴望するは永劫なる時 空間呪縛」

これって時間固定か！ ノイズ 侵食虫

侵食虫 : ナナシオリジナル、相手の魔法に使用されている魔力を分解する。

「まさか 空間呪縛 が破られるとは思いませんでしたよ」

あつぶねえ・・・ 脳内チャット のおかげで助かったー

「あははは」

「時間も残り10秒ですね」

10、9、8、7、6、5、4、3、2、1・・・

「ナナシ・・・捕まえた」

「えっ!？」

ぎゅつと抱きしめてくるのはイスカ

「というわけで勝者！イスカさん！」

うわぁーそういえばイスカを見落としてたー

・・・詰めが甘いの・・・

賞金1000Gをもらってうれしそうなイスカ、さっきまで逆さ吊りになってたせいでふらふらしているベルムントさんと共にギルドへ行き報告し城へ戻った。
部屋に戻るとフィルがいて

「なんでそんな楽しそうなことに私を誘わないのよ！」

とお叱りを受けた。

その6、忘れ物はないかい？（後書き）

《空間呪縛》は空間が固定されてるのなら時間も進まないから考えられないの《無詠唱も無理》ではないかという疑問は 脳内チャット という魔法で生まれた意識も魔法効果ということで時間の概念を受けないということで自己解決しました。

にしてもホントストーリーが進んでないですね。次は武術大会が始まるところまでは進みたい。

行間　く紅き竜は囚われるく（前書き）

主人公視線ではなく他のキャラ視線から武術大会編スタートです

行間　く紅き竜は囚われるく

朝、またあの忌々しい人族の顔を見ないといけないかと思うと自然とため息が出た。

不愉快極まりない、なぜ誇り高き竜人族が人族なぞに媚へつらわなくてはいけないのだ！それもこれもこの

首輪せいだ！

あれは3年ほど前

人族の商人としてやってきたグルマという男にこれは世にも珍しい首輪で装備すればどんな魔法であっても

すぐに制御できるようになると偽り当時はまだ魔力の扱いに慣れていなかった私は他の者からけなされるの

に耐え切れずついその甘言にのって　従属の首輪　なんぞつけてしまった私が愚かだったのだろう。

あの失敗のおかげで下種な人族売られては玩ばれ飽きれば売られてを繰り返してきた、この首輪には閻神の

加護のおかげで命令に逆らうことはおるか攻撃の意思を主人に向けてることさえできない、何より首輪を無理

にはずそうとすれば闇に囚われる。

もう自由に空を飛ぶことも無いのだろうか・・・。

ははは、もう涙なんぞとうに涸れたと思っておったが我にもまだ流す涙が残っておったか。

まだあどけなさの残る少女のほほを涙が伝う、紅き長髪に真紅の瞳、そして鱗のびっしり生えた尻尾が人族

でないことを証明していた。

「この世を旅立つ時は番となる雄と一緒にという夢や幼子をこの手に抱くことも叶わなかったか。」

ぼそりと呟いたその言葉は他の奴隷達の耳にも聞こえたがほとんどの者は希望を失い目に輝きを失っていた

。

「リイムトウス来い！貴様の新たな御主人様になるかもしれない御方が来ている、せいぜいかわいがって

貰えるように尻尾振って媚を売るんだな！」

いつの日か自由になったらまずこいつを殺してやる。

そう決意しながら向かった先にはいつものものようにいけ好かない人族の「貴族」とよばれる生き物が椅子に

腰掛けていた。

「おい、竜人族の上物がいると聞いてきたのにこんな餓鬼を出すとは貴様スフィーリアス家を馬鹿にしている

のか！」

確かに今の私は人族の子供の姿をとってはいるが人族の年齢にすれば百年はゆうに超えているというのにそ

の私に向かって餓鬼とは

「め、めっそもございません！このような餓鬼の姿をしておりますが見た目はこのような餓鬼でも竜人族

でございます！嘘だと思われるのでしたらこちらの剣でかの者を切り付けてお確かめください、竜の鱗はそ

の程度の武器では怪我はおるか傷一つ付くことはありません。」

近々行われる武術大会に向けて自分の代わりに奴隷に戦わせる奴がいるそんな奴らへの商品の性能確認だそ

うだ、確かにその程度のなまくらでは私の鱗に傷一つつかんが自らの力を見せずに力を誇示することになる

というのはいつ聞いても可笑しな話よ。

私を剣で切りつける貴族の男、剣はぽつきり折れて飛んでいく。

「おお、鉄の剣がまったく歯がたたんとは！よしこいつをもらおう！いくらだ？」

どうやら次の主人はこのあほうのようだな。

「ほら！ついて来い！俺が今日から貴様の主人だ！」

「かしこまりました」

心の中でこの馬鹿がと付け加えておく

私がこのあほうに買われて2日たったがこの「スフィーリアス家」というのはそれなりの地位をもった人族だあ

るらしく、私と同じ奴隷がたくさんいた、種族は人族、獣人族そしてあのエルフ族までもいた。

このエルフはもとは隠れ里にて住み薬や治療を生業としていたらしく道端で倒れたふりをしていた人族に捕

らえられ奴隷となっただけらしい。

この家にはあのあほうの他に弟が一人と両親がおるらしいが父親も弟もクズであると他の奴隷の娘達が嘆い

ておった、母親は優しい性格で他の者がこの家の者で唯一心を許しておる存在だそうだが体が弱く寝たきり

だという。

私と入れ違いのように出て行った獣人族の娘がいたそうだが、なんでもあほうの弟の奴隷であつたがどこぞの

庶民に取られたと大層腹を立てていたとか。

その話から奴隷の娘たちの間では通りすがりの心優しき勇者様が虐げられる獣人族の娘の美しさに心奪われ

悪の貴族の魔の手から救ってくれたなんていうストーリーが会ったりする。

どこの誰かはしらんがよくやったと褒めてやりたい、ん？取られた？まてまて、私たちはこの 従属の首輪

がついている限り主人はこのあほう共から変わるわけが無い。ということとは・・・

「まさか、この首輪を破り無事な者がおるのか？」

闇神の加護を受けしこの呪具を人の身で破壊したというのか？

もしかしたら私の首輪も壊してもらえるかもしれない、また空を飛ぶことができるかもしれない、そんな夢

がリムトウスの中に新たな希望として芽生えた。

ただし彼女は未だ見ぬお人よしで獣人族好きな勇者は竜人族の自分も救ってくれるのだろうかと少し不安に

なった。

翌日、あほうがやってきて私が武術大会に出るにあたってどんな魔法が使えるだけ剣が使えるかと問うて

きよった。

自慢ではないが剣なんぞ生まれてこの方持ったことなど無いと伝えてやる、むしろ我ら竜人族の武器は己が

体であり武器なぞ玩具にしかなんのだが

「そんな武器を使わずに戦うなんてなんて野蛮な！美しさの欠片も持ち合わせてないのか！これだからトカ

ゲは・・・」

貴様の身を包んでいる鎧なんぞこの爪にかかれば絹を裂くよりたやすく真つ二つにできるというのに、貴様

の許しさえあれば実演してやるのに・・・

「魔法は炎術というかプレスしか使えんぞ？」

まあ実は他にもいろいろ使えたりするのだが全部教えてやる必要など無い。

「魔法に対する防御はどうなんだ？水術に弱かったり土の槍には簡単に貫かれてしまったりしないのか？」

こやついったい私を何だと思っているのだろうか？竜人族は生まれ持って魔法に対する耐性が高い、私の場

合は炎とは特に相性がよいらしくマグマの中で泳ぐことが可能だ。

それから武術大会まで剣を使う練習をさせられた。

歯をつぶした剣を使ってカカシを殴ってみたり（カカシがこなごなに砕け散った）

重い棒をもって素振りしたり（衝撃波で屋敷にひびが入った）

と試した結果棍棒のような鈍器の方が相性がいいという結論に達し、手元は柄だが刃の部分が四角い鉄の塊

というものを本番では使うそうだ。

もう両手で数えるほどで武術大会だと思い出した時

「おい奴隷貴様にやる気が見えん！まさかと思うが武術大会ですぐに敗退しようとか考えるなよ？お前は優

勝するんだ、貴様の命より優勝を優先しろよ」

私の命も軽くなったものだ。

「命令するだけでは芸が無いそうだな、貴様が優勝すれば貴様の願いを一つ叶えてやろう。」

え！？ネガイヲヒトツカナエテヤロウ？

「優勝すればこの首輪から開放・・・される？」

「ああついでだ故郷まで送り届けてやろう」

目の前が滲んで何も見えなくなる・・・優勝すれば家に帰れる！

この貴族が出した甘い、甘すぎる餌は今のリムトウースの思考を「武術大会での優勝」で埋め尽くした。

愚かな竜の娘を見ていたレイナルド＝スフィーリアスの兄、ケルテ

ユム「スフィリアスは暗く静かに笑みを浮かべていた。

翌日からリムトウスはただ勝利を求めてひたすらケルテムの用意する冒険者を負かして力をつけてい

った・・・。

武術大会まで残り2日となった今日、リムトウスがケルテムに用意させた薬草、毒草、鉱石などさまざ

まな物が目の前に並ぶ

「こんなものどうするのだ？」

「私はこれからこれを使って奥の手を作る、これは竜人族にのみ伝わる物だ、だから主人とはいえ他の種族

が見ている前では作れないしばらく一人にしてくれないか？」

「いいだろう！飯などはその扉の前に置いておく勝手に取るがいい、明日またくる」

「わかった」

もし、この奥の手を使うことになる相手がいるとしたら同じく奥の手を使った竜人族か伝説クラスの猛者だ

ろう。

大会前日、ケルデュムに連れられて武術大会の登録をかねて下見に行く。

全身をローブで覆い招待を隠し大会当日まで対処法をとられないための予防だった。

「はい、ケルテュム」スフィーリアス伯爵様の代理奴隷としてリイムトウースを出場ですね承りました」

登録を済ませると下見を始める、魔力による探知に反応は無いおかしな匂いも・・・ないとしたところで強

大な威圧感を一瞬感じる、今の自分なら片手どころか息一つでこの世から消滅させられる程の力、しかし自

分の隣にいるケルテュムも他の出場者達もまったく感じていないようだ、もしかこの大会のレベルは自分と

は比べ物にならないくらい高いのではないか？あれだけ強大な気配を一瞬とはいえ感じないわけが無い、木

に止まっていた鳥はすでにどこかへ飛んでいってしまっこの近くには鳥の声が聞こえない。

「あの、ケルテュム様先ほど何か感じませんでしたか？」

「どうした？戦う前からびびったわけではあるまい？」

やはり隣に立つ人族は感じなかったようだ。

ん？そういえばさつきから受付の方が騒がしい気がする、何か揉め事でも起こったか？耳を澄ましてみると

「怪我人は術者だけか」や「自業自得だよ」等という声が聞こえる。

「それでは帰りましょう」

「もういいのか？」

「はい、下見は十分です、これから明日に向けて魔力を蓄えます」

「では戻ろうか」

たとえどんな怪物がやってこようと私は勝利し私の帰りを待つあの村へ帰るんだ！

家に戻るとなんだか他の奴隷達があわただしく動き回っていた。

「何事だ！」

「お帰りなさいませケルテム様、それがレイナルド様が・・・」

レイナルドの部屋へ駆け込むケルテム、レイナルドは顔と右腕に大きな熱傷を受け痕を完全に消すことはできなかったそうだ。

「レイ、どうしたんだ！次男とはいえスフィーリアス家の血を受け継ぎし者がここまでやられるとは相手はど

んな奴だった！？」

「ごめんなさい、ケル兄様、私も武術大会へ参加登録するべく列に並んでいるとあの庶民がいきなり私に向

かって火球を放ったのです」

「なんだと！？例のレイから獣人の奴隷を奪ったというあの庶民が？」

「はい、髪も瞳も漆黒のように黒く腰にグレートソードとソードの中間くらいの大きさの変わった剣を持つ

ておりました、私は悔しいです・・・あのような者に二度もやられさらに私のこの美しい顔に傷をつけるな

んて」

「安心しろレイ、敵は必ずとる！肉片一つ残さず刻んでくれる、スフィーリアス家にたてついた事を後悔させ

てやる、だから安心して療養なさい。」

「貴様も聞いていたな？もし対象が武術大会に出ていた場合生まれてきたことを後悔するほど痛めつけて殺

せ、命乞いや降参などは許すな確実に息の根を止める。」

「私は人族の見分けがほとんどつかないできれば対戦相手が対象であつたなら合図等で教えて欲しい出なけ

れば対戦相手をすべて等しく殺さねばなくなる。」

「いいだろう対象だった場合に《ライト》の魔法を使って貴様に知らせてやる」

部屋に戻って、さきほどの話に妙な違和感が残るあのレイナルドという男、何か隠していないか？と考える

のだが何がおかしいのかわからない。

だめだ、明日の大事な試合の前に雑念は捨てなければ。

あいつらの復讐は言ってしまうえばついでだ、私が今考えなければいけないのは明日を確実に勝つこと、途中

で負けてしまえば私は命を奪われる所ではすまないだろうな、いや
負けた時の事など考える必要など無い！

私は明日、勝利を重ねて優勝という名の自由へ翼を手に入れるんだ。

「私は、まだ終わってなどいない！明日すべてに終止符を打ち村へ
帰るんだ！」

空を見上げると大きいが少しかけた月が見えていた、紅い髪の少女
は天に向かい手を突き上げ吼える。

明日、満月の元で私は故郷への馬車に乗っているはずだと自分に言
い聞かせながら床についた。

行間　く紅き竜は囚われるく（後書き）

少しずつポイントが上がって行くのはうれしいですね。

こうしたほうがいいんじゃないかといったアドバイスなどあったら送っていただけると作者のスキルアップに繋がるのでとてもうれしいです。

自分で考えた名前なのに間違えていたのを修正しました。
次は主人公視点にもどります

そのフゝおお！勇者よ！死んでしまふとは情けないゝ（前書き）

一話上げることマイリストが一人ずつ増えてます！うれしいね！
ありがとうございます。

そのフゝおお！勇者よ！死んでしまうとは情けないゝ

だいぶ楽に振れる様になってきたな。

・・・まだまだ今のナナシの剣技など餓鬼の遊戲に等しいわ、それにほれ昨日騎士の者と手合わせしてもらって思い知ったであろう？その程度では武器のみを使つての勝負では勝てぬと・・・

昨日、騎士の稽古にお邪魔させてもらい、実力が知りたいという大勢の兵士達の希望により模擬戦闘をさせてもらった。

結果は全敗、「それなりに剣を使っているがまだまだ剣に振り回されている」というコメントまでもらってしまった。

もう大会までもう日がないというのに大丈夫なのかな、なんとかダリルは倒してお姫さんの問題を解決してやりたいんだが、最悪魔法を使つてでもダリルには勝とう。

・・・魔法を使えばナナシでも上位までゆくのもたやすいだろう、しかし、それでいいのか？ナナシ武術大会というならば剣のみしか戦わないと言つておつたのではないか？・・・

レオ、俺はそこまで聖人じゃないから、むしろ悪役だよ？ずるいとせこいことをしてでも勝ちに行くよ？

だが卑怯な手は使わない。

・・・ん？卑怯な手とずるい・せこい手は違うのか？・・・

まあ、俺なりの言葉遊びだよ

さて今日は大会への参加登録をしに行くんだがすっかり口を滑らせたものだからフィルもついて行くといい出した結果フィルを城門前で待つという羽目になった。

イスカはいつものように俺の隣に立ち腕を絡めていた、何が楽しいのかわからないが尻尾はご機嫌に踊っていた、それに腕にあたるやわらかさを感じるだけで俺は幸せなんだが。

「すまないな！待たせた！」

今日はまた目を惹く格好だった、髪を後ろでまとめて上げて帽子で隠しパツと見ただけでは少年のようにしか見えないその姿だが隣に立っている付き人さんのおかげでわがままな商人のぼっちゃまに見える。

「どうじゃ！これならば私がフィルネシアであるとわかる者もおらぬであろう！」

「もしかするとドレスで来てもばれなかったりするんじゃないか？さつき道行く人に聞いたらフィル王女様はとても物静かでお淑やかな方だそうだ」

「私のその話をきいてなぜドレスを着て歩いても大丈夫などという言葉が出てくるのだ？」

だってその噂欠片も当たってないじゃないか！と言おうとしたら途中で殴られた。

広場で歩きながらも食べれるサンドイッチのようなものを食べながら登録するために受付へ向かった。

「う、出遅れたか、仕方ない並ぶか」

受付にはすでにすごい列が出来ていた、その最後尾を探していた時

「見つけたぞ庶民！この間はよくも私に恥をかかせてくれたな！」

周りの人たちがずっと引き俺達とレイナルドを遠巻きに見ている。
マントを着けたレイナルドがこちらを見てわめいていた、その姿を見たたんイスカの尻尾が下がったのを俺は見逃さなかった。

「これより貴様に裁きの鉄槌を下してくれる！強大なる炎神よ！我が声に応えてその力を示せ！」

・・・愚か者めこのような場であのような上位魔法を使用するとは、
ナナシこの場所で下手に受け流すと周りに被害が出る！・・・

わかってる！かといってあたるわけにもいかないし、仕方ないか自業自得だレイナルドには来年の武術大会を頑張ってもらうことにするか

「《フレアボール》」

「威力減！《自業自得》」

レイナルドが放った大玉ほどある火球は俺の目の前まで飛んでくると空間に波紋を残して消える、そしてバスケットボールほどになった火球がレイナルドへ飛ぶ

「なっ！」

とっさにかわそうとしたレイナルドだが逃げ切れずに当たる火柱が起きるが爆風は俺が上へ逃がしたため怪我人は出なかったようだ

「ぎゃあああ！おのれ！おのれ！おのれ！この借り必ず倍返しで返してくれる！覚えてろよ！」

ついでに癒してやろうかと思ったのだがさっさと逃げていくその姿を見ると大丈夫なようだ、というかフィルが近くにいる今でなければ障壁で耐えるなどの方法もあったのだがさすがに何発も耐えれないと思ったので早々に負けてもらうことにした。

さて登録をと受付の方へ向くとさっきまで長蛇の列が出来ていたのが数えるほどしか並んでいなかった。

「ふ、今のナナシを見て勝てないと尻尾を巻いて逃げたか」

フィルさんとっても楽しそうですね。

並ぶ手間が省けたのでよしとするかな、そこでフードを被り全身をコートで覆った不審者とぶつかりこける。

「おっと、ごめん」

「ああすみません、急いでいたもので」

「おい！奴隷の分際でなにをもたもたしている！さっさとこい！」

このフードの子は奴隷でアレが主人なのだろう、俺は立ち上がって手を差し出す。

「怪我はないかい？」

驚いた様子で俺を見るその目は真紅だった。

「大丈夫だ、主人が呼んでいるのでこれで・・・ありがとう」

走り去っていく様子が広場で最初に会ったイスカとダブった。

「はい、えっとそれではナナシ様が武術大会に出場されるのですね？」

ちらつとイスカの方へ目を向ける受付のお姉さん

「はい」

「ではこれで登録完了となります、明日はご武運を」

ありがとうと残して城へ戻る。

帰り道フィルから聞いた話だと最近では貴族達が自ら傷つくのを恐れ、代わりに戦闘力の高い奴隷を戦わせることが多くなってきたそうだ。自分は傷つくことなく奴隷に戦わせて自分が高い地位に就く、より強い奴隷を飼いならす事が貴族の仕事という人もいるとか。

今椅子に座って本を読んでいるイスカを見る、青い瞳がせわしなく動いている。

こっちの視線に気付いたイスカが「何？」とたずねるが「なんでもない」と返すとまた本を読むため視線を落とした。

イスカの頭をやさしく撫でて離れようとするともっととせがまれしばらく撫で続けることとなった。

たまにはこんな静かな時間があってもいいだろう。

「おい！なぜそこで押し倒さんのだ！」

ここはナナシの部屋の前、少しドアを開けて中の様子を伺っているのはこの城の第二王女のフィルネシア様・・・のはずだ、俺は長いことこの城の警備にあたってきたがフィルネシア王女とはこのような人物だったのだろうか、もっと物静かで窓際で本を読まれはかなく微笑んでいらっしやったあのフィルネシア王女はどこに行ってしまったのだろうか、だがこの活発に行動なされるフィルネシア様のほうが本当のフィルネシア様なのだろう、以前の時々見せたさびしげに見える姿もここしばらく見ていないと侍女達も話していたこれもすべてナナシ様がいらっしやったおかげなのであるのか？

確かにいきなりナナシという冒険者をこの城へ呼べとおっしゃられた時は何事かと思ったが姫にも何か考えがあったということなのだろう。

今しばらく放っておこう扉の前ではしたなくも中の様子を伺う王女を横目で見ながら兵士は思うのであった。

「ナナシー！待ちに待った武術大会当日だぞーいつまで寝ておる！ほらさつさと起きて支度せぬか！ふぎゃ！」

ナナシの部屋に元気よく入りまだ寝ていると思われるナナシを起こすためベットに近づくが近づいたとたんベッドの中から抵抗を許さ

ぬ強い力でベッドの中へ引きずり込まれる。

ん？抱きしめられ、え？なに？へ？つと思考が暴走して考えがまとまらない、腕の主はさらにフィルを抱きしめ反撃を許さない。

あわわわ、ままだ早いわよ？まずは結婚してからって子供を作って子供は男の子と女の子を一人ずつは欲しくてでも先に子供を作るのも嫌ってわけでもなくて、ってあれ？そこで目の前にやわらかい感触があることに気付く。

布団をのけるとフィルの腕をつかんだのはイスカで獣人族の彼女の拘束を解くだけの力はフィルにはない、そしてベッドの上にはイスカしかおらずナナシの姿は無い。

彼女は数分後に素振りから帰ってきたナナシに救助された。

「まったく酷い目にありましたわ、にしてもまだ同じベットで寝ていましたのね」

イスカのやわらかい抱き心地が素晴らしくて離れられませんでした！なんていえるわけもなくナナシは笑ってごまかそうとする。

「ではどうですか？今夜は私のベッドで御一緒にしません？」

そうしな垂れかかりながら問いかけたフィルに一瞬ドキッとしたもののからかわれていると思ったナナシは

「冗談でもそんなこと言ったらだめだぞ、そういうのはフィルが心に決めた人に言ってやるべきなんだから」

「私に魅力が無いから？だから冗談だといってごまかすの？」

俺の服を引つ張り珍しく食い下がってくるフィルに驚いたが

「俺はフィルに魅力が無いとは思わないよ、むしろフィルは魅力的で美しい女性だよ」

真剣にそう思う、磨き上げられた美貌は隠せないものだ昨日も変装はしていたが男性の目を引いていた。

「なら・・・」

「でも王女という肩書きがあるフィルは冒険者の俺のような者が珍しくてそれを恋心と勘違いしているのだろう」

そこでパツと俺から離れるフィル

「ふっ！まんまとだまされたなナナシ！いつも本当に王女なのか？とか魅力が無いなどと言っておったくせに私の魅力にメロメロではないか」

だまされた・・・完全に騙された、もしあそこでうなずいていたなら完全な笑いものになっていただろう、

いや王様の耳に入れば打ち首もありえない話ではない。

なんて危ない罠なんだ、と冷や汗が出てきたので一度顔を洗おうと水場へ行く。

「ほんとにナナシは愚か者なんだから・・・」

そんな声が聞こえた気がした。

闘技場と呼ばれた武術大会の開催地は人で溢れていた。

フィルは王族として特等席があるからそっちで見ているといい、イスカも一緒に行かないかと誘っていたがイスカはそんな特等席より観客席で見ていると断っていた。

バルドーさんは会場入り口で俺の武器を持って待っていてくれた、彼曰く自信作だそうだが、ただし今ここで現物を確認して欲しいと言われて剣を抜いたところ貸してもらっていた剣の半分くらいの重さしかなくて驚いた、バルドーさんはこの顔が見たかったそうだ。

武術大会は王様の開会の言葉から始まりルール説明、最後に進行説明となった。

周りを見回すと大きな斧を持った筋肉質な男からきらびやかな鎧を着た細身の男もいる、あれは魔法使いだろうか杖を持った者もいる、いろんな者がいるなと思っていたら後ろから声をかけられた。

「おい、あんたが昨日スフィーリアスの貴族を返り討ちにした庶民ってのは」

振り向くと大きな牙を持つライオンの顔をもつ獣人がそこにいた。

「ああ、返り討ちというか自分の身を守っただけだ。」

身長はナナシよりはるかに高い190ぐらいあるんじゃないか？と見上げるするとすぐに笑みを浮かべて

「おお！そうか！そうか！お前が我らの同胞を助けたというシヨミン殿か！」

おっとこのライオンさんは俺の名前がシヨミンだと勘違いしている。

「いや、俺の名はシヨミンじゃなくてナナシっています」

「おっと名を違えるとは失礼した、ナナシよ、俺の名はロウエンという、家名はわけあって話せないすまない」

悪い人ではなさそうだ、握手を求めると驚きながらも笑いながら応じてくれた。

獣人族を平等に扱ってくれる事が珍しくそして自分に対して握手を求めた人族は少ないらしくうれしいと話してくれた。

「では本戦で会おう！」

ここは本当に異世界でした、ライオンと握手できたよー、肉球は少し硬かったけどふにふにしてたー！

・・・らいおん？にくきゅう？・・・

レオはテンションの上がりっぱなしの俺に疑問を感じているらしかった。

武術大会のルールは簡単にまとめると

相手を殺さず気絶、もしくは降参させれば勝ちとなるただし相手が戦意を喪失し審判がそれを確認していたのにもかかわらず攻撃を加えた場合失格となることもある、ただし本戦では死の危険があるので早めの降参を勧めていた。

武器、魔法の使用は許可されているが武器使用の際は戦闘開始前に申請することが必要。

と人族にかかるルールはそれくらいだ

観客席にまで及ぶような魔法は禁止、高位の魔法使いが結界を張ってはいるが危険が伴うため

さすがにすべての試合を1対1で進めるのは時間が足りないので4つのブロックに分けてバトルロイヤルで人数を減らすそうだ、逃げ回っていても本戦にはいけるんじゃないのかと思ったが一定以下の人数まで減らない限りバトルロイヤルは終わらないらしく手っ取り早く終わらすには他の人に眠ってもらうのが一番よさそうだ。

さっきのロウエンさんとは別のブロックか、ダリルは本戦からの出場だからさくつと本戦へ行かせてもらいたいな・・・

「おい見ろよ、人族の餓鬼が混じってるぜ」

「武術大会もなめられたものだな」

「きつと金を惜しんだどこかの貴族の坊ちゃんか奴隷だろう？」

「それでは武術大会予選始め！！！」

ナナシの周囲の参加者はナナシがこの中では一番弱く倒しやすいと思ったのだろう全員が剣を抜いて飛び掛った。

が、ナナシの周囲に張り巡らされた風の幕によって空高く舞い上げられ地面にたたきつけられた。

ナナシは奇襲者が舞い上げられた瞬間に魔法を使う

「抵抗はやめて、おとなしくしなさい《テイザー》」

《テイザー》：地球では電気銃の名を持つその魔法は目標へ向けて電流を流し気絶させるただそれだけの魔法だった

この魔法は地球の警官をイメージするので詠唱の変わりに例の警告を言ってしまう。

電気という概念の無いこの世界では自然の雷やモンスター以外麻痺を与える魔法はあっても電気という魔法が無いらしい。

このブロックの敵は2名、なんでも無いという顔をしている男、障壁を張って防いだ女魔法使いが残っている。

「そこまで！」

もう一撃を加えようとした時終わりの合図が告げられた他のブロックを見てみる、結構派手にやかしかしたところがあつたようだ黒煙を上げているブロックやボコボコの穴だらけになっているところもある。

一つのブロックを除いておおむね3人ほどの出場者が出ている、そのブロックは一面血にまみれており死に至った者はいないということとだがそのブロックにいた者は等しく体の一部分を失ったという。

「1回戦は対戦相手が決まり次第行いますのでしばらく選手待機室等でお待ちください！」

このまま連戦でもよかったのだが血の片付けや穴の処理などあるのではしばらく休憩となったようだ。

「若いのになかなかやるじゃない」「いい技だった対戦の際は正々堂々戦おう！」

と同じブロックの人たちは休憩室の方へ去っていく。

観客席にイスカの姿を見つけて近寄っていく、メリルさんやジョーイさんそしてなぜかフューデイルのギルドのお姉さんがいた

「メリルさんジョーイさんお久しぶりです！イスカ、本戦出場決定したよ！」

「あんたが出るって聞いて久しぶりにこっちまで見に来たんだからね」

「あんた変わった魔法使うんだなーびっくりしちまったぜ」

「ナナシ・・・かつこよかったよ」

「カカシさんー無視するなんてひどいですー」

無視したわけじゃないんですその魅力的なバストはなかなか忘れれるものじゃないですから、ただ、名前を知らないだけなんです

「あー、そういえば名乗ってなかったでしたっけーフューデイルのギルドでー受付してますーセシリアとー申しますー」

「えっと、お久しぶりです」

心を読まれたわけではないよな？

「うふふふふ・・・」

読まれていてもおかしくないのか！？え？受付必須技なのか！？
と思っていたら

「お待たせいたしました！対戦カードが決まりましたので選手の方は本部の方までお越しください！」

おつと行かないとな

「じゃあ行ってくる、また後でなイスカ！」 「行つてらっしゃい」

「いいねー！若いつてのはー初々しいじゃねえか！」

少し走るスピードが上がった・・・。

俺の相手は大きな鎌を使うエルフのお姉さんだった。

見るからに重そうな鎌を片手で持ち歩くのをみてエルフって弓以外も使えるんだって素直に感心した。

「それでは！第1回戦一撃でそのブロックの数多の選手を倒したナシ選手この町に滞在する庶民冒険者だそうです！対するはエルフ族の綺麗なお姉様ゾルディア選手！ふとももの深いスリットから男は目が離せない！」

ですよねー、どうやって調べたのか知らないプロフィールを読み上げていく司会者さんあなたとはいい酒が飲めそうだ。

他のブロックの対戦カードが発表されていく

「ねえ、ナナシさん？貴方ってもしかしてあのフューデイルで噂の獣人奴隷をかけて貴族と取り合った色ボケお人よし冒険者さん？」

なんかフューデイルに戻るのが怖くなってきたんだけど何その噂！？

「色ボケでもお人よしでもないと思いますがたぶん俺・・・なのかな？」

「アハハハハ！こんなところでそんな有名人に会えるなんてね！後でサイン頂戴よ！まさかあの物語は現実にあつた話を多少誇張したなんて書かれてるから単なる物語だと思ってたのにホントに黒い瞳と黒髪の冒険者が獣人族の女の子と仲良く話してるんだから、いやー面白い！これだから世の中わからないよねえー」

おねえさんものすごい笑ってるよ、こっちは何の話やらさっぱりなんだがとりあえず後で詳しい話を聞いてみよう

「あーそうそう、噂のユニコーンの騎士さんには悪いけど手足失うくらいは覚悟しといてよね？」

ものすごいことを笑顔で言わないで欲しい。

戦闘開始ともに《強化》と《脳内チャット》を起動させておこう、エルフって事は魔法は通用しないと思っておいた方がいいかもしれないな。

・・・いや、あの娘もしや、ナナシ全力で《ノイズ》をあやつに打ち込んでみるといいもしかするともしかするかもしれん・・・

《ノイズ》なんて攻撃力の無い単なる集中力を乱す程度の技なのにそれで勝てるとは思えないがやらないよりかはマシか

「それでは！一回戦！始め！」

「バラバラに切り裂いてあげちゃう！」

さっきのお姉さんはどこ行っただの！？ってほど怖い豹変を見て一瞬のラグが起きるそのうちに間合いを詰められる。

初撃を剣で受けてその威力に逆らわずに飛んで距離をとる。

「いい反応するじゃないの、やっぱり戦闘はこうでなくっちゃほらほらあ！つぎいくよお！【残影】！」

ゾルディックが鎌を振るうと反対側から鏡あわせのように影の鎌が現れる。棒高跳びの要領で飛び越えて剣をがら空きの背中へたたきつけようとするが、地面から生えた鎌の影が剣を弾く。

「いいわあ、早く貴方を切り裂いて貴方の血でここを真っ赤に染めてあげる。」

ん？よく見たらエルフ耳の周りに何か魔法を使ってる？

「我はここに願う《疾風の刃》！」

カマイタチが無数に飛んでくる。

「《ストーンウォール！》」

イメージの問題だと思いがレンガの壁が現れてカマイタチを受け止める。

「我はここに願う《風神の息吹》！」

《風神の息吹》：風の弾丸を飛ばす精霊術

レンガの壁が崩れていく

今のは魔法とは違った気がするけどあれも魔法？

・・・いや、あれはおそらく精霊術だと思われる・・・

精霊術？魔法とどう違うのさ

・・・魔法は自らの魔力を消費して力を行使する、一方精霊術は精霊と契約しその精霊に願うことで力を行使する、魔法は使用者の魔力量によって威力等が変わり魔力が尽きれば魔法も使用できなくなるが精霊術はその精霊によって力の差はあるものの願う者によっての差は無いさらに使用の制限も無いが精霊は気まぐれ屋な者が多くよほど気に入られておらんとあのように力を使うことはできんだらう・・・

「何をブツブツ言ってるのかしら？我はここに願う《極寒の風》！」

《強化》した足でサイドステップする今までいた場所が凍りついていく

「まだまだ！我ここに願う《漆黑なる刃》！」

黒い刃が無数に飛んてくる

「《自業自得》！」

黒い刃は空間に吸い込まれて空間に波紋が残りゾルディアの周りに

波紋が現れ無数の黒い刃がゾルディアに向かって飛ぶ、しかしそれをひらりとかわす。

「なかなかやるじゃないの！まさか一回戦からこの子まで使うことになるとは思わなかったわ！我はここに願う《風神の子シルフ》！」

・・・ほお！下級の精霊とはいえ直接召還するとはな、なかなかあの小娘もやるものだな・・・

確かエルフって超長生きする生き物じゃなかったっけ？見た目はあんなお姉さんでも実は100年も200年も生きた婆さんだと言われそうでなんか素直に萌えないんだよな

・・・ナナシ、おぬし戦闘中にそんなことを考えておったのか・・・

「もう終わりがしら？我はここに願う《影の針》」

地面から無数の針が生えるのを飛んでかわす。

「そこ！」

飛んだところに風の精霊がすかさず風の刃を飛ばしてくる

「《暴風壁》」

予選で使った風の幕を張って風の刃をいなす

「今のをさっきみたいに壁で防いでいたら貴方ごとバラバラになったのに」

「なら次はこつちから行こうかな《氷槍雨》！」

一面に氷柱が降ってくる

「甘い甘い！【残影】！」

鎌を振るい氷柱を砕く

「ふつ、ならば男性の皆様ごらんあれ！《鎖呪縛》！」

ゾルディアのまわりの床から一斉に鎖が現れ彼女を縛り上げていく
「おおおおおお！」という歓声上がる。

「ヴァージョン亀甲縛り」

鎖を絡めつける呪縛術があつたのでもしやこれなら出来るんじゃないかとおもつたら出来てしまったよ

・・・基本的に想像できるものなら魔法は現実にすることが出来るのだがあまりつまらないことに魔法を使うでない・・・

あのナイスバディをなるべく傷つけずに勝つには動きを封じるのが一番そしてさらに見てるほうもうれしいものがこの鎖呪縛Version亀甲縛りなのだ！

「くっ」

ゾルディアが鎖によって締め上げられた次の瞬間シルフが鎖を断ち切った。

まあそれなりに楽しめたからよしとする。

「よくも辱めてくれたわね！」

「えっと観客にサービスを・・・」

「だまらっしゃい！我は願う《影刃乱舞》」

突然あたりを黒い刃が無数に現れ飛び交っている強化してなかったら今頃ズタズタだろう。

「もらった！全方位からの【残影】これなら逃げ場は無いわ！」

振り下ろそうとした鎌はその場から動かない。

「鎌が・・・動かせない!?」

「《ノイズ》」

「いぎいいいい」

ふう、《空間呪縛》で鎌を固定して驚いている間に《ノイズ》を耳に叩き込むという作戦は成功したにしても見事に泡吹いてるね。

・・・うむ、エルフ族は基本隠れ里に住み隠密や遠見などを得意とする狩人でな耳がとてもよいと聞いたことがあるのだ、今回は聴覚の強化までしておったようだから音で攻撃するなんて思ってもいなかったのであろうな・・・

「おっと！ゾルディア選手気絶を確認！勝者ナナシ選手！2回戦進

出！」

全身ローブで隠した選手が控え室に帰っていくのを見つけて後を追うようにして控え室に入るとそこにはイスカが待っていた。

「イスカ？」

「おかえり」

「ただいま、じゃなくてなんでここにいるの？」

「あそこからじゃナナシとあんまり一緒にいれないから」

イスカはナナシに回復薬を渡して隣に引付くように座る。

そうですね、警備員はいないのだろうか・・・と思ったが、よく考えてみれば今は武術大会で出場者には奴隷もいる主人に会いたいからと選手の控え室に行く奴隷などいないから奴隷は素通りできるのか・・・

「おい、その人族！」

まだこの控え室にいる人族は俺だけだと言っても控え室にいるのは俺とイスカ、そしてフードの選手だ。

少しうるさかったかなと思い

「ああ、すみませんうるさかったですか」

といってイスカの方へ向こうとすると

「いや、そんなことではない一つ聞きたいのだがその獣人族も選手なのか？」

「選手じゃなくて単なる観客ですけど？」

「ならばなぜここにいる？こいつは貴様の奴隷だろう？奴隷が人族を好んで付き従うなんて話は聞いたことが無い！」

「イス力は奴隷じゃない！俺の大切な仲間だ。」

「この人は皆獣人」奴隷って思ってるのかと考えたがイス力首輪してるから余計にそう思われるのか

「え？奴隷ではない？でも首輪をしているぞ？」

「形だけだ」

「でも私はナナシのモノ、ナナシだけのモノ何時如何なる時も一緒にいる」

「いやぁホントに可愛い事言ってくれるじゃないか！その獣耳のついた頭を撫でちゃう！」

「それはすまなかった、こちらの勝手な思い込みで不愉快な思いをさせた」

「ああ別に気にしてませんよ」

「ナナシというのは貴方の名か？すまない名を尋ねる時は自分から名乗るべきだったな、リウムトウスだ、リウムと呼んでくれ」

フードを取り紅く燃える様な髪に真紅の瞳はルビーのような輝きを放っていた。

「ナナシです、こう見えて冒険者しています、こっちは俺の大切な仲間でイスカです」

よろしくと手を出すとリイムトウスは戸惑いながら質問した。

「私は奴隷だぞ？その上竜人族だ」

「あれ？握手は嫌でしたか？」

おや？竜人族の奴隷さんは握手をしてはいけないのだろうか？

「リイム、ナナシは奴隷であつても差別しない、私も少し前まで奴隷だったけどナナシは私を救ってくれた」

それに・・・とイスカが続けていく

「ナナシは可愛い女の子が大好きだから」

うおい！イスカさん！？とんでもないこと暴露しないでください！確かに好きだけど！リイムも美少女だけど！

その言葉にリイムトウスが何かを思い出したようにつぶやく

「もしか、あのお人よしの冒険者？」

うう・・・やっぱりそんな風に伝わってるのね

「多分その噂のお人よしです」

その言葉をきいてリィムトウースはすぐにナナシへ騙されて首輪を付けられた事を話した。

「なるほど、今すぐ取ってあげたいんだけど一度君の主人にあって話をさせてもらいたい、イスカの方は首輪を取ることが出来ればイスカを開放すると約束したから開放したのであって誰でも解放していたらキリがないし単に俺を利用して逃げようとしている奴もいるかもしれないからね」

「そうか・・・」

すっかり落ち込んでしまったリィムトウースの頭をイスカにやるように撫でながら

「大丈夫、リィムが話してくれた事を疑っているわけじゃないんだ、きっとリィムの首輪も取ってあげられる」

「うう・・・」

ポロポロと涙を流しながらナナシの胸に顔をうずめるリィム、ナナシは落ち着かせるように抱きしめる。

とそこで他の参加者が帰ってきた、イスカがさっとリィムにフードを被せた。

「それでは2回戦の対戦カードを発表します！選手の方は集合してください！」

少し声を殺して泣いていたが落ち着いたのだろっリムは「ありがとう」と言つと控え室から出て行った。

「それじゃあイスカ、行つて来るね」

「行つてらっしゃい」

イスカは腕をナナシの首に回し唇を触れさせた。

「おまじない・・・これでナナシは負けない」

こんなおまじないまでもらったら負けるわけには行かないな

「選手の皆様！これより2回戦を始めます！」

えつと目の前には見覚えのあるライオンさんが立ってます。

「よお！ナナシ！運がいいな！俺に当たるなんてお互い全力で殺ろうな！」

百獣の王は百獣の王だったあ！

・・・大丈夫だ、ナナシ何のために特訓してきたのだ「やれば出来る」だろっ？・・・

そうだな

「ロウエンさん勝っても負けても恨みつこ無しですからね！」

「その意気や良し！」

「それでは2回戦始め！」

《強化》と《脳内チャット》を始動させて剣を抜いて切りかかる

「先手必勝！」

全力で切りかかるがロウエンは片手で受け止める。

「この程度か？気合を入れる死ぬぞ？【獣王双牙】」

ロウエンが拳打ち込む、前からの打撃のはずなのに後ろからも同時に殴られたような衝撃が走った

《強化》してなかったら今の一撃で身が碎けていたんじゃないだろうか。

「ほう、今のを耐えたか、ならば！」

ジグザグに走り突撃するロウエン左右の揺さぶりをかけて目の前で来たところで左からの一撃をなんとか剣を使って防ぐが体重差により飛ばされる。

少し飛ばされるが踏みとどまり正面にロウエンはいなかった。

「こつちだ【琥孔】！」

ロウエンの攻撃は背後から突き抜けるように通っていった。

「こんなものか？フィーデルの有名な人だっていうから期待したんだが」

速いな、さすが獣、だがこつちもイスカに勝つて約束したんだ全力で倒させてもらうか。

そんなに有名になりたくないから目立たないようにと思ったんだがこの人相手にそんなことも言ってられないか。

剣に魔力を通す、《強化》を3段階まで上げてロウエンの後ろまで一気に走り剣を振ってロウエンを打ち上げる。

「がはっ、いつの間に？」

空中で向きを変えながら地面に降りようとするが向きを変えた時死角を通してロウエンへ剣を叩きつける。

「《重力の枷》」

《重力の枷》：数秒間対象の重力をコントロールする

打ち付けるのと同時にロウエンにかかる重力を7倍にして1秒程時間差で自分へ《重力の枷》をかけて追撃として剣を打ち付けるとロウエンの体が地面にめりこむ。

「ぐっ！」

パツとロウエンから離れるとロウエンは何事もなかったかのように立ち上がった

「今のはなんだ急に動きが見えなくなっただぞ？それにあの攻撃もあんな攻撃は見たことがない！もつとだ！

もつと我を楽しませろ！」

いやああああ！この人、戦闘狂だあ！

・・・そのようだな、ナナシ足か腕の一本でも切り落とさんと止まらないか？・・・

痕が残りそうなのは遠慮したいんだが

「どうした？今ので終わりというわけではなからう？こないのであればこっちから行くぞ！」

最速で近づき下からの地面スレスレからすべるように拳をナナシの体へ叩き込もうとするが、そこにナナシはいない、剣の魔力を雷と変えロウエンの脇を打つ、ロウエンの体へ雷が流れる。

「おお！この痛みは雷獣のそれと似ておる！」

これもだめか

「どうしたナナシ、お主の剣には殺気が感じられんぞ？」

「もちろん殺す気なんてないですからね」

「ナナシ、我を相手に本気で言っているのか？」

「当たり前ですよ、これは大会ですルールがあり、殺し合いをする場ではないですから」

「周りを見てみる、それでもまだそんなことが言えるか？」

1回戦とは違って2回戦はあたりが赤く染まっていた。
どの対戦相手も血を流していた、腕を失っている者もいる。

「1回戦までは血を流す前に終わっちまうことが多いが2回戦からはちがう、気絶なんて手加減は出来ないって事もあるが勝利もしくは死だ」

「それでも……俺は殺しはしません」

「その信念自分が死に掛けても同じことが言えるか試してやろう！」

剣の魔力を炎へ変える地面を擦りながらロウエンへ向かう下からロウエンへ切りかかる、斬撃を手の甲で受け止めたロウエンは拳を突き出す、半身で交わして魔法を放つ

「《石の槍》」

地面から石の槍が生えるがロウエンはバクテンで避ける。

剣の魔力を土と風を交えたものへ変えて振る、剣から風の刃を生みロウエンへ迫る、ロウエンは風の刃を拳で叩き潰して攻勢にでる。

「そろそろ決めさせてもらおうか【縮動】」

一瞬でナナシの後ろへ回ったロウエンは手に魔力をためている

「これが我が一族最高奥義【獣牙】だ！」

ロウエンの腕がナナシの体を貫く、大量の血液と呼ばれる液体が流れ落ち地面に水溜りを作る。

ロウエンはその手に未だ鼓動を続ける心臓を握っていたが、その手に力を込め握りつぶす。

そのフゝおお！勇者よ！死んでしまふとは情けないゝ（後書き）

戦闘の途中で切ってみた・・・モヤモヤするね！続きを決めてるだけにモヤモヤする！これが漫画の王道魔法続きが読みたくナール！馬鹿言っでないで続き書きます。

変なところで改行されていたので修正

その8ゝ初めてのボス戦レベルを上げて（r y）（前書き）

警告！警告！警告！警告！

グロ表現が含まれます！

警告！警告！警告！警告！

過度なグロ表現が含まれます！

警告！警告！警告！警告！

気持ちが悪くなった方はすぐに戻るを押してこのページから戻る事をおススメします

その8ゝ初めてのボス戦レベルを上げて（ry）

ロウエンはその感触に自らの勝利を確信していた。

その肉体の温度が冷めていく感触、微動すらなくなっている肉の塊、この塊にもう用はない手を抜こうとするがなぜか抜けない。

後ろから貫いたなのにナナシはこちらを見て笑っている。

なぜだ？ナナシは人族、心臓をつぶされれば吸血鬼ですら消滅する。人族という種族は首が一回転なんてしないはずだ、ならばこれはなんだ！？

「【琥孔】！【獣王双牙】！」

もう片方の腕でナナシの体を攻撃するだが一向に腕が抜ける気配がない、それどころか手の感覚がない。

次の瞬間、腕が抜けなかったのが嘘のように抜ける。

ただし、ロウエンに見えていた部分以外はナナシに刺さったまま、ロウエンには痛みも血も流れていない。

なんだ！？どうなっている？こんな技は知らない！見たことがない！こんな技を

使う奴なんて聞いたこともない！

クククク・・・とナナシは晒う

「貴様は一体何だ！人族というのは嘘であつたか！」

だがナナシは応えない、ただ、ただ、晒い続ける。

「ならば引き裂いてくれる【豹擬爪撃】！」

ななしの体はロウエンの爪によって3つの大きな傷が出来る。
もう一度と爪を見るとナナシを切り裂いた部分のみなくなっている。

「一体どんな魔法を使っていると言っのだ！【琥穿連撃】！」

一瞬にしてナナシの体は粉々に碎け散る。

だがロウエンの腕も消え去るしかしナナシの笑い声はどこからともなく聞こえていた。

あたりは一面赤く染まっているその中ロウエンは一人立っている、
声は聞こえるのに姿の見えない敵。

下を向くと血の池の中にナナシの顔があった、その笑みはこちらの
心を見通した

上でこちらを感情のない目でみてあざ笑うかのように笑っている、
即座に右足で踏みつけるが、地面などないかのように右足はどこまでもナナシの顔へ沈み、体勢を崩したロウエンは地面に倒れる、右足は付け根からなかった。

左腕も付け根からない、右腕は二の腕から先がない。

残った左足だけでは立ち上がることすら出来ない、近くを見ると先ほどのようにナナシの顔がこちらを見て笑っていた、ロウエンは左足をその顔へ叩きつけ、左足を失った。

腕も足も失ったロウエンの耳には未だ笑うナナシの声が聞こえていた。

立つことも移動することも出来ないロウエンは首を持ち上げて周りをみる、血溜りの中には無数のナナシの顔がありすべてが声を上げて笑っていた。

「やめてくれ！俺の負けでいい！負けでいいから笑うな！黙れえええ！黙ってくれえええ！」

どれだけ時間がたっただろうが、ロウエンは自分が何を求めて戦い何のために生きたのかもわからなくなっていた。

私はだれだ？

ここはどこだ？わからない・・・

もうなにもわからない・・・

そこで世界に亀裂が入る。

「おはようございますどうでしたか？《最果て》は」

そこは武術大会の会場で自分は仰向けに寝ていて体には幾多の捕縛術が施されていた。

「俺は・・・誰だ？」

「おや、ちよいと魔力込めすぎたか？ほらロウエンさん立ってください試合は終わりましたよ」

そうだ！思い出した！俺の名はロウエン、ロウエン「エンフィールドだ！誇り高きエンフィールド国にて王となった者だ！武術大会にて我の力を見せ付けてベルリア国に我の力を示しこの国で起こっている獣人に対する差別意識の改革、奴隷の解放のためにやってきたのだ。

腕を失い足も失ったはずなのに体に傷一つないとは、この人族の少年は我に何をしたというのだろうか？

と言うかこの者の前に立つことが恐ろしくて震えが止まらないのだが王として弱点を見せてはいけないという意識で平気な振りをする。

「もう大丈夫ですか？」

「あ、ああ、大丈夫だ、ナナシ一体、俺にどんな魔法をかけたのだ？」

「それは企業秘密です」

「きぎょうひみつ？それはなんだ？我はお前の体を確かに貫いたはずだ！」

「だめですよ！これは秘密ですから」

ナナシは秘密と言い張って教えてはくれなかったが

「ではまたどこかで会えるといいですね」といいナナシを殺そうとした我を友として受け入れてくれた、王であることを隠し、殺そうとした我のすべてを許し受け入れた人族。

「ナナシ・・・か」

会場から去り故郷を目指してロウエンは帰路についた。

・・・で？・・・

で？ってなにが？

・・・ロウエンに使った魔法の話だ・・・

あああれ？反則に近いんだけど、ロウエンさんが【獣牙】を打ちこんだのは土を変化させて作った偽のナナシで気が緩んだ瞬間に《最果て》って名づけた技を使ったのだよ。

・・・その《最果て》とは？我にはロウエンが見たものはわからぬのだ説明してくれてもよからう？腕を偽者に突っ込んだ所まではわかるのだがそのあとロウエンは仰向けに倒れた目を開いたまま、それから何をするでもなく待っていたらあの降参宣言だ・・・

《最果て》はね相手の精神を削る魔法なんだよ、かけられた相手は夢を見るとびっきりの悪夢をね、悪夢は人によつて違ふんだけどどんな人でも悪夢を見せ続けられたらやめてくれと頼むでしょ？それがあの降参宣言だったわけなのだ

・・・すべての相手にそれをかけたらいいのではないか？ならばすべての相手は何もせずとも負けを認めて優勝できる・・・

あの時は隙が出来たからできたけど、普通の人に《最果て》を打つても効かないんだ隙があつて初めて使える魔法なんだ、それにこの技はね《従属の首輪》壊した時にその魔法を感じてできた魔法だからあの魔法に近いんだけど、さっきのロウエンさんのようにあまり強くかけると精神の死つまり心が壊れちゃうんだよ。
だからあまり使いたくない。

・・・そうなのか・・・

とりあえず控え室に戻ろうか。

こうして2回戦もなんとか突破したナナシは次の相手がダリルだと知る。

「おかえり・・・」

「ただいま」

リィムとイスカが仲良く話していたリィムも勝利をしたという。

このまま優勝すれば首輪をはずしてもらえするという主人との約束をナナシに話すと当たるとすれば決勝戦、もし決勝戦で当たったなら負けてもいいとリィムと約束した。

優勝には興味はないしダリルが優勝できなかったらそれでいいし優勝するのがリィムならばフィルも無理やり婚約することもないだろう？

・・・なにせよナナシがダリルを倒さなくてはならんが・・・

ロウエンさんに比べればあんな奴たいしたことないさ

・・・だといいが・・・

「これより準決勝を始めます！」

「ふん！下賤な庶民の分際でこの高貴な私と戦えるのだからな！神に感謝し我が美しき剣技の前にひれ伏すがいい！」

「それはそれは、この下賤な庶民はせいぜいダリル様の相手ができるよう頑張らせていただきますよ」

「下賤な庶民にしては身分と言うものを理解しているようだな」

「いえいえ、私が理解しているのはダリル様がどうしようもないマザコン野郎だつてことくらいです」

「貴様―私の母上への愛を愚弄する気か！」

「おや？マザコンが通じるとは思わなかったぞ？」

「そんな滅相もない、下賤な庶民の私にはマザコンの気持ちなどわかるはずもございません」

「まだいうか！」

「ところでダリル様、マザコンの意味を知っておられますよね？どなたからどのように聞き及んでいますでしょうか？」

「フィル王女より母親からはなれることの出来ない腰抜けの事だと教わった！言い残す事があれば聞いてやるぞ？」

「やーい！マザコンー！」

「殺す！」

「それでは準決勝はじめ！」

「ダリルは疾風の如き速さで走る《疾駆》」

《疾駆》：高速で移動できる、《強化》との違いは魔力量によって変化はないが

安定した速さを得られる。

《強化》、《脳内チャット》始動！

「ダリルの剛剣は何物にも阻む事は出来ず敵を葬る！《鬼力充実》」

《鬼力充実》：ある程度の間鬼神の如き力が出せる

「はああ！」

ダリルの横薙ぎの剣を剣で受け止めるが受け止めきれず吹っ飛ばされる。

「まだまだこれからだ！ダリルの放つ刃は相手を切り刻む！《飛翔氷刃》！」

氷の刃が無数に飛びナナシに向かう。

「【残影】」

ナナシの剣が氷の刃を砕く。

「【瞬動】」

ナナシの姿がぶれたと同時に背後から衝撃が走る。

まさか前回の優勝者が新人の庶民に負ける？その事実には観客席にいた貴族達や王族に驚きをそしてダリルには庶民に負けたとあれば公爵の地位を剥奪される可能性もある、なんとしても負けるわけにはいかない。

ダリルはこっそりと懐へ忍ばせておいた薬を使う、今はもう製造法すら定かでない禁断の秘薬、戦闘力を飛躍的に上げることが出来ると言われているが、この薬は3つ連続して使ってはいけないついていたのは2つまでだと念を押されていた。

「ダリルの前には何物も・・・」

「遅いですよ！ダリル様？」

詠唱の途中で顔にナナシの膝蹴りが入る、3回転ほど吹き飛び止ったダリル。

なぜだ！戦闘力は上がっているはずだ！なのになぜこんなにダメージを受ける？

立ち上がったもう一つ薬を使い剣で切りかかる、ナナシに剣を折られた。

「【獣王双牙】」

前と後ろから同威力の衝撃を受けてその場でひざを就くダリル。

嘘だ、俺は強いんだ、何者にも負けないんだ！そうだ、ここでこいつに勝ってファイル王女を手に入れてこの国の王となる、そう私こそ王にふさわしいのだ！

そしてダリルは3つめの薬を使った。

変化はすぐに起きた、まずダリルの両腕が異常に膨らんだ、足、体と順に

「ははは！我は最強！貴様如き庶民に絶対にまけんのだ！」

ナナシは剣に風の刃をまわらせて足を切るが風の刃は足に傷を負わせる事はできない。

鉄でもすっぱり切れるくらいには魔力込めてるってのに傷もつかないとは

・・・ナナシ、こやつはなにかおかしい一度引け・・・

「にい、にがさぬあい！」

剣をたたきつけた床が砕け地割れが出来る。

なんて威力だよ

《フレイムランス》《アイスランス》《サンダーランス》《アイアンランス》！

火、氷、雷、鉄の槍がダリルへ向かって飛ぶが、火は蹴散らされ氷は砕け鉄は跳ね返された。

これも効かないのなら《空間呪縛》！

空間ごとめようとしたが止まった空間が砕けてしまう。

「庶民の分際で目障りだよ」

右手ではたかれて飛ぶが受身を取り

《フレイムレイ》！

フレイムレイ：超高温の炎を圧縮しレーザーのように照射する

「熱いなあもう！」

ダリルの振るった腕に吹き飛ばされるナナシ、《フレイムレイ》が当たった箇所は少し焦げた程度だった。

「庶民なんぞ我の・・・」

吹き飛ばしたナナシに追撃をかけようと瞬間動きが止まる。

・・・どうした？・・・

うごきが止まった？

「あああああああ a d g j m f p o l a l : f v o i e n t a
e n : a o s i v n w」

突然ダリルが吼えると皮膚の色がドス黒い緑色へ変化していった。

何が起きている？

ナナシは今日の前で起きていることを理解できなかった。

唯一ダリルだと証明できた頭はもう肉に埋もれてしまっ
てみる事はできない。

色が変わった後元は胸であつた辺りに目が開き腹には口が開く。

化け物だ・・・モンスターだ・・・

観客席の誰かがそう言った。誰が言ったのか定かでないがぽつり
もらったそのつぶやきは観客達をパニックにさせるのには十分だっ
た。

我先にと逃げようとする観客達。

「なぜ逃げるんだ！貴様達は私は王だ！王から逃げるものは皆死刑
だ！」

元ダリルだったモンスターはそういうと観客席から逃げようとする
人々へ向かおうとする。

「《鎖呪縛》《空間呪縛》《拘束沼》」

ダリルを沼に落としその上から鎖で封じてさらに空間を固定する。

「おいおい、マザコン貴族あんたの相手は俺だぜ？」

「庶民、庶民、庶民、しょみん！貴様は絶対に許さんぞ！」

そういつたダリルは一瞬ですべての呪縛を壊すと落ちていた剣を拾
いナナシに切りかかる、ギリギリかわすが次の瞬間、ダリルの中か
ら出てきた剣にナナシは右肩を切られる。

その勢いを保ったまま一回転したダリルに弾き飛ばされるナナシ追
撃とばかり飛び上がりナナシを踏みつけるダリル

「どうした？庶民？もう一度だけ聞いてやろう私なんだったって？」

「何度でも言っただけだよ、ママが大好きで大好きでたまらないマザコンやろう」

その瞬間ナナシの左腕が胴体から離れた。

「あああああ！」

全身を激痛が走るが血は出ない、切り落とされたが表面は焼かれて炭化しており

血液が流れる事はなかった。

「腕を切り落とした程度の苦痛では殺してやらない、

もっと

もっと

苦しんで

そして

死ね！」

その8ゝ初めてのボス戦レベルを上げて（r y）（後書き）

最近ファフナー見ました、おかげで作品に大きく影響が出ました、
ここまでグロくならない予定だったのに

その9、上上下下左右左右B A、（前書き）

引き続きグロ注意！

その9上下下左右左右BA

「どうした！もう声も出ないか！」

眼前に広がるのは化け物と化したダリルと逃げ遅れた人たちが観客席にちらほら見える

「さっきまでの威勢はどうしたあ！？俺様は王だ！王なんだよ！王に齒向かうものはすべてミナゴロシダア！」

ダリルは右腕を失い、踏み潰しても叫び声すら上げなくなったナナシを蹴り飛ばす。

そうしてあたりを見回して初めて気がつく、観客はすべて逃げてしまっていて誰もいない、代わりに騎士があたりを囲み魔法使い達がその後ろで魔法を詠唱していた。

「おい！なんだよ！歓声はどうした！観客はどこへいった！俺を称えろ！俺を崇めろ！俺は・・・あれ？俺は誰だ？俺は一体誰だ？何だこの体は？」

自分の体を見下ろしてもう人と呼べない異形の姿へと変化した自分の姿を自覚する。

「騎士団の精鋭達よ！我らの力を持つてすればあのような化け物も敵ではない！全軍進撃！魔法隊は機を見て戦略魔法を打ち込め！」

騎士達がダリルへと剣を突き立てようとするがその皮膚は剣を受け付けない。

「雑魚が！王に剣を向けるとは身の程を知れッ！」

ダリルの腕になぎ払われる騎士達、それを機と見た魔法使い達は魔法を解き放つ、ダリルを中心とした3m範囲に白色と化した高温の炎が召還される。

「邪魔だ！」

ダリルは腕を伸ばして衝撃波を伴ってなぎ払う。

「貴様ら全員、処刑してくれる！」

それは鎧を着た騎士達はダリルによってなぎ払われ叩き付けられ投げ飛ばされた。

「弱い！よわすぎるぞ！どうした！もう終わりか！俺は王だ！すべては俺の物だ！すべての者は俺にひれ伏せばいいのだ！」

「ナナシ！」

「ああ？」

ダリルが目映ったのは赤い髪の女が動かなくなったマリオネットのようなゴミに駆け寄っていくところだった。

「王である俺を敬い、称えるために駆け寄って来るのならわかるが王の眼前でそのようなゴミクズへ駆け寄るとは貴様も死刑だあ！」

ダリルの左腕が伸びてリィムへと襲い掛かるとつさに剣でガードするがそのまま壁に叩きつけられる。

リイムは口から血を吐き出す、魔法隊がダリルを氷付けにしてその動きを止める。

「ナナシ、首輪が壊せる位の魔力があるんだからあんな化け物倒せるんだろ？私の魔力を使つて癒してやるからあいつを倒してくれよ」

リイムの魔力がやさしくナナシの体を包み始める、その時、ダリルを閉じ込めている氷に亀裂が入り氷が砕ける。

「この程度で王であるこの俺を倒せると思うなよ！」

ムチのようにしならせた腕を魔法隊のいるあたりへ叩きつける、障壁を張った魔法使いもいたようだが腕は一瞬の停滞も見せずにクレータを作る。

ダリルの足元で打ち付けた剣が刃こぼれを起こしたり剣が折れた騎士達をダリルはつかみ上げた時

「【琥孔】」

ロウエンがその手を殴る。

「なにやらものすごい殺気を感じて戻ってきてみればナナシ殿は瀕死、騎士隊、魔法隊も壊滅寸前で暴れまわっているこの化け物は一体？」

「また邪魔者かあ！王を殴るとは無礼者め！直接死刑にしてくれる！」

「ぐう・・・なんという力だ」

獣人族のロウエンの力を知る者たちならばこの光景は奇異なものに見えるはずだ、単純な力ならば獣人族の隣に立つものはいないとされるほど獣人族は怪力の持ち主だ、ロウエンは中でも1、2を争うほどの実力者であると自覚している。

その自分でもこの化け物が相手だと押されていた。

「【琥穿連撃】」

ダリルはその衝撃に一步後ずさった、その事実にはダリルは激しい怒りを覚える

「俺が押される事などありえない！俺は最強！何物にも負けない！雑魚が何人集まろうと俺には傷つけることなど不可能なのだ！」

ダリルはロウエンを殴り打ち上げると空中にあるロウエンの体を掴んで地面へ叩き付けた。

「ナナシ！ナナシ！」

「リイ・・・ム？」

「もう少し待って！貴方の腕をつける事はできないけれど傷を癒すくらいは出来るから！」

そうか、俺はダリルに右腕を取られて叩きつけられて気を失ったのか。

「リイム！イスカは？」

「大丈夫！知り合いだって言う宿屋の夫婦に任せてきた。」

周りを見ると避難は完了したようでもう逃げ遅れた人はいないみたいだ

騎士達では戦闘にもなっていないようだし、ロウエンさんが頑張ってくれてるけど押されてるな、早く戻らないと

「なんとかアレをなんとか倒さないとリィムとの決勝戦が出来ないよな」

「えっ？」

「ありがとう、もう大丈夫だ」

「でも、傷は完全に治ってないよ？」

「ロウエンさんだけに任せておける相手じゃないんだ」

《強化》《脳内チャット》起動！

アレの動きを止める！《重力の枷》！《鉄の杭》！

ダリルの足の上に鉄の杭が現れて皮膚に当たって止まるが重力の手助けを受けてさらに食い込んでいく！

「があああ！」

文字通り足を釘付けされたダリルはその場にとどまる。

「ナナシ殿！無事だったか！」

「あんまり無事とはいい切れませんでしたけど、なんとか」

「私も手伝おう！」

ロウエン、リィム、ナナシはそれぞれの技をダリルへ打ち込む。

「【獣王咆哮】！」「【竜炎咆哮】！」「《雷神の槌》！」

《雷神の槌》：極大の雷が落ちる

ロウエンが掌から白色の玉を飛ばし、リィムは口から火炎を吐き、止めとばかりに雷が落ちる。

「やったか？・・・」

砂煙が立ちこめる中から多少はダメージを受けたダリルが現れた。

「王に向かってこのような攻撃するとはこの狼藉者共め！」

「あれでもダメなのか！」

ダリルが足元の杭を無理やり抜いてこちらへ歩いてくる。

「まずは貴様からだあ！」

ダリルはナナシを掴むと反対側へ投げた、ちょうどそこは入場者の入り口であった。

「ナ・・・ナシ？」

そこにはいるはずのないイスカがいた。

ダリルはこちらにもう一人少女がいることに気がついたようでリィムとロウエンを弾き飛ばしこちらへ向かってきている。

「イスカ、逃げてくれ！」

「ナナシ？ナナシは私を助けてくれたから今度は私がナナシを助けるね」

隣を通り過ぎてダリルの前に立つイスカ、その足は震えているがしっかりと目の前の化け物を見据えていた。

「ナナシは殺させない！」

「き・・・貴様も狼藉者をかばったな？貴様も同罪だ！死ねえ！」

ダリルの腕はさらに一回り太くなり、イスカに向けてふりおろそうと掲げられた。

やめろ・・・助けないと・・・

やめて

デモアシガウゴカナイ

やめてくれ

カラダニチカラガハイラナイ

やめてくれ

オレハムリヨクナノカ

やめてくれ

オレハナニモスクエナイノカ

やめてくれ

アンナモノナケレバイイノニ

・・・すべてを消せば済むだろう？我に任せておけすべてを『消し
て』やろう・・・

世界が

黒く

染まる・・・。

「死ねえ！」

誰もが赤き鮮血を撒き散らして潰される少女を幻視する。

いつまで待ってもこない衝撃にイスカが目を開けると片腕でダリルの一撃を受け止めたナナシが立っていた。

「獣人族の娘よ、端へ寄っておるがいい」

ナナシの口から出た言葉なのにナナシとは別人の声。
驚きながらもその場から離れる。

「何なんだよお前は！」

掴まれた腕を動かそうとするがびくともしない。

ナナシはダリルを空高く投げ飛ばし

「がああ！」

咆哮とともに口から目に見えない何かが飛んで行きダリルへ当たり爆発を起こす。

「あああああ！」

ナナシが千切れた腕を掴み傷口同士をくっつけると切れていなかったかのように腕がくっ付き変化していく。

リィムは目を疑った竜人族の戦士のような鱗がナナシの体を覆い尻尾が生えている。

焼け焦げたダリルを掴んだナナシは壁に向かって叩きつけ、ダリルの体を扉を開けるように引き裂く。

「馬鹿め！」

ナナシの引き裂いた箇所が口となり炎を吐き出す。

ナナシは一旦下がって間合いを取る、立ち上がったダリルが近くにあった剣いくつかをまとめて大きな槍としナナシへ投げつける。

が、ナナシが右手を前にかざすと槍は黒い壁に吸い込まれて消えていった。

「があああ！」

ダリルの右腕をナナシの爪が楽々と引き裂く。

「ぎゃああ！なんなんだよ！なんなんだよ！お前は！」

ダリルが左手を振るうと十を越える氷の槍が出現し、ナナシに向かって飛ぶ。

ナナシも同じように腕を振るうと黒い幕のような壁が氷の槍を包み込み何事もなかったかのように消える。

ナナシの額に角のようなものが生えると同時にナナシが吼える。

「ああああ！」

飛び上がったナナシがダリルの体へ蹴りを入れる、地面へめり込み周りから見えるのは足だけとなったダリルの足を掴むと壁に向かって投げ飛ばした。

よく見るとナナシの手にはダリルの足が握られたままだった。

「返せ！俺の脚を返せえ！」

ダリルの悲鳴にも近い叫びとともに百を越える炎の槍がナナシへ飛ぶ、全ての槍はナナシが一瞥しただけで発生した無数の黒い球体に吸い込まれていった。

「うああああ！」

ダリルは空を飛んで逃げようとする、高速で飛び上がったその姿は他の者には消えたようにしか見えなかった。

「がああああ！」

更なる咆哮により背中に羽を生やしたナナシが空に舞い上がって飛んでいく。

「なんだアレは・・・」

「俺たちの次元を超えてる」

「何だよアレ！化け物じゃないか！」

静まり返った闘技場に響く叫び。

「イスカ殿、貴方はナナシ殿のあの姿を知っていたのですか？」

首を横に振るイスカ

「あれはナナシじゃなかった」

「どういふことです？」

「ナナシは私をイスカって呼んでくれるのにあの人は『獣人族の娘』って呼んだ」

「一体どういうことなんだ」

「ナナシ・・・」

イスカはナナシの消えていった方向を見ていた。

ダリルは度重なる魔力により近くの森へ降りざるを得なかった。

「何なんだアレは！俺が王だぞ！騎士団もあの庶民も他のやつらも俺に攻撃を加えるとはそんな事は許されるはずがないんだ！」

そこで天を仰いだダリルの目に空からこちらを見下ろす金色に輝く瞳の異形と目が合う。
ナナシ

「は、ははは・・・何なんだおまえはああああ！」

残りの魔力を全て使いナナシへと放つ、決まった方向性を持たせないまま打ち出された魔力は時に火に時に水に姿を変えながらナナシへ向かう、が今度もナナシの右手から打ち出された黒い球体が全てを飲み込みながらダリルへ向かう。

迫り来る黒い球体を見ながらまったく動けない事に気がつく、体には地面から生えた影のような黒い人型がダリルを捕らえていた。

「離せ！離せええええ！俺は王に・・・」

最後まで声を聞き取る事は出来ずにダリルは黒い球体に包まれて消える。

「終わったか、ナナシをあの子の下へ届けねばなるまいな」

再び羽を羽ばたかせて闘技場へ戻っていく異形を複数の町の人が目撃した。

その9ゝ上上下下左右左右B Aゝ（後書き）

グロ展開に入ったとたん一気にマイリスト数が増えました。
世界はグロを求めている！って事なのでしょう？

その10ゝ色恋沙汰は人傷沙汰ゝ（前書き）

マイリスト10人越えた！やったね！

その10 色恋沙汰は人傷沙汰

「ナナシ・・・」

ここは城の地下にある牢屋、清潔とは程遠いその場所にナナシは寝かされ、その傍らにはイス力がいた。

異形と化したダリルを倒したナナシはイス力達のもとに戻ってくる
と人の姿となり獣人族の娘後は任せたと残して倒れた。

国の騎士、魔法使い達が全力を尽くしてもまったく歯が立たなかったダリルを圧倒的な力で倒してしまったナナシを王は恐れ、城の最下層にある牢屋へナナシを閉じ込めたのであった、イス力は城の客室に滞在することが許されていたが一日のほとんどを牢屋で過ごしていた。

イス力は蝋燭の光しか明かりのない牢屋の中で先ほどの話し合いを思いだす。

「・・・なのでありまして武術大会の勝者はどうなるのでしょうか
！」

王の間では武術大会についての話し合いが開かれ、開催委員会の者、ケルテム、リイム、ナナシの代わりとしてロウエン、イス力が集まっていた。

「ナナシ、ダリル両名はモンスターである事を隠し参加していたのです！理由は確かではありませんが今すぐにでもあのモンスターを殺

すべきです！」

「いや、早計ではないかケルテム殿、ナナシ殿は我らを救ってくれたではないか、モンスターならばダリルのように我らを殺していてもおかしくなかるうか？」

「私もロウエンと同じ意見だ、ナナシは確かに異形の姿をしていたが私達に危害を加えようとはしていなかった。」

「ナナシは私を助けてくれた。」

ケルテムは自らの奴隷にまで反論されるとは思っていなかったように言葉を失っていた。

「ならばいかがでしょうか？もし決勝戦を行うにしても闘技場があるような状態で行う事は不可能、ナナシ選手の意識も戻っておられない事ですし闘技場を修理し修理が終われば次第決勝戦を行う、ただしナナシ選手の意識が戻らない場合不戦敗という形でリィムトゥース選手が優勝するというのは」

余計な事を言いやがってと心で毒づきながらもケルテムは了承したのだった。

さっき聞いた話ではダリルによってボロボロになった闘技場だが5日ほどで完全に元通りとなるらしい。

ダリルの家族であるキリアン一族は公爵でありながらモンスターを息子として国家反逆を企んでいたとされ国外追放となった、死刑とならなかったのはキリアン家は代々王家に使えてきた三貴族のうちの一つで国に多大なる貢献をしていたため、形こそ国家反逆とされてはいるがこれからの彼らの身を案じての国外追放だった。

大会の話し合いが終わり、その後王と当事者達により次の話し合

いが始まる、議題はナナシとは何者なのか。
ロウエンは一国の王として自分ならどう対処すべきだろうかと思い
描きつつ話し合いを進めた。

騎士隊、魔法隊から有力な情報はなくナナシの変化を目にした者も
少ないと報告した時リィムが発言する

「私の故郷に『イーツ』という語り話があるんだがその『イーツ』
という存在にナナシの変化した姿が似ている気がするのだ・・・で
す」

王の前ということ思い出して慌てて語尾に付け加えるリィム

「言葉遣いなどどうでもよい、その『イーツ』という話を聞かせて
もらえぬか？」

「『イーツ』というのは私が祖母から教わった話で竜人族を助けた
旅人の話です、掻い摘んで物語を説明すると砂嵐と共にやってきた
旅人は全身をローブで隠して一夜の宿を取る、その晩、300を越
える野党が略奪にやってくるのですが、ローブを着けた旅人が野党
を一人で退治するのです、戦いの途中でローブを切り裂かれて出て
きた姿を物語の中ではこう伝えていきます、金色の眼、額に角と強靱
な尾を持ち、鱗に覆われ皮膚は剣を弾く、翼で飛翔するその者『イ
ーツ』と名乗る」

「確かに報告にあったモンスターの姿と一致する点があるな、その
『イーツ』と呼ばれるものはモンスターなのか？それとも我らのよ
うな人なのか？」

「そこまで詳しい事はわかりません、ただ野党を退治した『イーツ』

はそのままでこかへ飛び去ったとあります、おそらく危害を加えない限りは無害と考えて大丈夫ではないでしょうか？」

「うむ・・・あの戦闘力は恐るべきものだもしアレがこちらに向けられた場合この国は数分と持たずに消滅するだろう、衛兵！あの者を最下層の封魔牢へ」

「なんで！？ナナシはナナシだよ！？ボロボロになっても私や皆を守るために戦ってくれたのに何で牢屋に入れられなくちゃいけないの！」

涙を流してイス力が叫ぶ

「イス力殿、確かにナナシ殿は我らを救ってくださいました、感謝しておりますですが王の言う事も確かなのだ、イス力殿もおっしゃっていた通りあの変化の後、彼は別人のようだったと、だったら我々に襲い掛かってくる可能性も捨てきれないですよ」

「私はナナシを信じてる！誰が何て言ってもナナシはナナシなんだから！」

部屋を飛び出すイス力、残された者に彼女を止められる者はいなかった。

アレから今日で2日ナナシは目まだを覚まさない、イス力はナナシの胸に耳をつけるあたたかい温もりと共に聞こえるゆっくりとした、けれど力強い鼓動。

「イス力殿少し休まれてはいいかがか？私がその間見ておきますから、

ナナシ殿が起きられても貴方が倒れてしまったらナナシ殿も悲しみます」

ナナシの額に口付けをして城の与えられた部屋に戻る。

医術士は身体的な問題はなくすぐに目を覚ますはずだと言ったがどうして目を覚まさないのだろうか？

もしかしたらもう2度とナナシは目を覚まさないのでは無いだろうか？

部屋に入ってふとそんな事を思ったとたん体に力が入らなくなる、嫌だ、ナナシに私は救われた、奴隷となっていた私を助けてくれただけじゃない、獣人族の私を一人の『人』として見てくれた、仲間だと言ってくれた、可愛いと言ってくれた。

そんなナナシに私はまだ何も返す事が出来ていない、なのに！このままいなくなっちゃうなんて嫌だよ！

「ナナシ・・・」

ベッドに顔をうずめた、ベッドは一人だと広がったけど寒かった。

「あの大会委員め！いらぬ事を！」

スフィーリアス邸ではケルテムが苛立ちを募らせていた。

弟と約束した庶民らしき人物も見当たらず復讐を果たしてやる事も出来ず武術大会では優勝を決める事もできずもしあの化け物が目を覚ませばリィムには万が一にも勝ち目は無いだろう、準優勝を取っ

たところで家の地位は上がるとも思えないむしろ化け物に負けたという事で下げられる可能性もある。

「奴隷！貴様なぜあの場で大会の勝者とならなかった！」

「すみません、ですが私は正々堂々とナナシと戦って勝ちたいのです」

「貴様はあの化け物に勝てると言うのか？あの闘技場で何も出来なかった貴様が？」

「くっ……」

「奴隷！最悪相打ちでもいいからあの化け物を倒すんだ！さもないと貴様を嬲り者にした挙句ゴブリン共の餌にしてやる！」

「はい……」

勝ちを譲ってもらえるとわかっているもののもしモンスターに精神を支配されていたらと思うと全力で戦わなければならない。もしもの時はリィムは『奥の手』を使う覚悟をする。

3日目

イスカは城の庭に咲いていた花をいくつかもらい地下牢へ行く。ロウエンに感謝を伝えて牢の中のナナシに話しかける。

「ロウエンさんが体拭いてくれたんだってね、これ見て？綺麗な花でしょ？このお城で咲いてたのを貰ってきたの」

花を自分の髪に挿す

「どう？似合うかな？ナナシにもしてあげるね？」

ベッドの傍の椅子に座ると語りかけるように話し出した。

「ねえナナシ？ナナシが戦ったおかげでたくさんの人が救われたんだよ？コニード亭の女将さん達も言ってたよありがとって、ナナシ、昨日ベッドで寝たらね、ベッドが広いの！広すぎるの！いつの間にかこんなに広がったんだろってびっくりしちゃった！・・・なんでいつもみたいに笑ってくれないの？頭を撫でてくれないの！」

イスカはナナシに泣き付く

「このまま一人は嫌だよ、寂しいよ・・・ナナシ」

ナナシの手がイスカ頭の上に置かれる

「ナナシ！？」

「どうしたんだよ、せつかくの美人さんが台無しじゃないかイスカ」

「ナナシー！」

イスカに抱きつかれるナナシ、泣きながら抱きつくイスカに苦しいので離してと言いつけずしばらくそのままにしていたがその苦しさすらも悪くないと思った。

ナナシが目を覚ましたという情報は城中に広まり、ケルテムの耳

にも入った。

「くッ！あの化け物め！目を覚ましたか！これで決勝戦は確実に行われるわけだ！クソッ！」

身近にあつた椅子を蹴り飛ばす。

「家の奴隷が竜人族とはいえ騎士・魔術隊がまったく齒が立たない相手では試合にすらなんののではないか？」

ケルテュムはどうすればあの化け物を倒して地位を守る事が出来るかだった、準決勝を成し遂げただけでも十分に快挙でケルテュムの両親も喜び浮かれていたためケルテュムの事が見えていなかった。

こうなればあの奴隷の魔力を暴走させて一緒に消し飛ばして・・・いや、それだと回りに被害が出る、周りに？そういえばあの化け物は確かに人の避難を優先したのだったな。ならば・・・

そこへ一人の奴隷がなにやら急ぎの様子でやってくる。

「ケルテュム様、当屋敷にこちらの文のようなものが届けられました」

「相手は？」

「わかりません、裏口に挟まれておりました。」

宛名がケルテュムとなっていた事も含めて怪しいと思ったのだろう、畏の類が無い事を確認して封を切る。

中に入っていた文を読んだケルテュムの表情が変わる。

「おい！急ぎ腕の立つ奴隷を用意しよう奴隷商と連絡を取れ！化け物が目覚めたとしてもこれなら、これならば勝てる！」

ケルテュムの笑い声が館に響き渡った。

「はい、あーん」

「えつとイスカさん、一人で食べれます」

「ダメ、ナナシは怪我人なんだから」

いつも以上にべったりなイスカに戸惑いつつ自分の気絶していた数日間のことを聞いた。

異形な姿の自分のこと、ここにいるわけ、2日後には決勝戦が待っている事イベントが目白押しすぎて泣きたくなくなった。

「なあイスカ、武術大会終わったら逃げちゃおっか？」

「なんで？ナナシは悪い事してないよ？」

「まあそうなんだけどこのままだと面倒事に巻き込まれそうな気がするんだ」

「悪い事をしてないんだから逃げる必要なんてないよ」

「そうだね・・・」

イスカの頭を抱き寄せ頭を撫でる。

「あー、御両人入ってもいいかな？」

ロウエンさんが牢の前で顔を赤くして頬を掻いていた。

「どうぞ？」

イスカはナナシのベッドに腰掛けているのでロウエンは椅子に腰掛けて話をはじめ

「単刀直入に聞こう、おぬしは誰だ？」

「えっと、俺の記憶が正しければロウエンさんにそれを訊ねられるのは2回目だと思いますけど？名前はナナシ、冒険者ですよただの」

「ふむ、ならばあの異形の姿はなんだ？」

「それです、本当に俺が変身したんですか？」

「間違いないこの目で見ておったからな」

「そんな変身したって言われてもねえ、俺はまったく覚えてないし今変身しろって言われても出来ませんよ？」

「そうなのか、ではナナシ殿はこれからどうするのだ？この国を出

て行く気はあるのか？」

そこまで言った所でイスカが止めに入る

「ナナシはまだ怪我人で今やっと起きたとこなんだから」

「そ、そうであつたな」

イスカの全身の毛が逆立ちロウエンさんが押されている、また来ると残して早々に撤退したロウエンさん

武術大会で俺を戦闘力で圧倒した戦闘狂はどこへいったんだろうか？

「ナナシも、もう少し寝ててまだ傷が完治してないんだから・・・」

「ああ。」

ベッドに横になり目を閉じるとまた意識が遠ざかる。

夢の中真つ暗な闇の中に白い光が話しかける。

・・・ナナシ、すまんなお主の体を使って獣人族の娘を助けたのはよかつたんだが、予想以上に力を使いすぎて体が変化してしまった・・・

変化？

・・・そう変化だ、私の使う魔力は特殊でな我にしか扱えんそれを使った事でお主の体が私の魔力を使える体へと変化してしまったのだ。・・・

という事はイスカの言ってた異形の姿ってのはその変化後の姿？

・・・そういうことだな・・・

変化が起きて困る事って何かある？

・・・いや、特にこれといって無い、私の魔力を多用すれば変化するかもしれないがそれ以外は変化は無いはずだ・・・

ならいいか、なるようになるさ！それにレオはイスカを助けてくれたんだからな礼を言わなければいけないのはこっちだ、ありがとう
レオ

・・・ありがとう、ナナシ・・・

暗い部屋の中窓が無いので昼間なのか夜なのかすらわからないが近くにイスカがいないことから夜だと判断する。

寝転がったまま体の調子を確認する千切られたはずの右腕問題なし、そういえば何でくっ付いてるんだろう？医者がつけてくれたのか？

足、体、頭問題なし！派手に戦闘しない限り問題なさそうだな

そこで通路の奥から声が聞こえる見張りの兵士だろう

「この奥にはあの闘技場で大暴れした怪物が封印されているんだとよ」

おっと俺怪物になったよ？

「そういえばお前も知ってるだろ？毎日あの怪物の世話に行ってる可愛い子！あの子をどこかの貴族が狙ってるって話」

なん・・・だっ・・・！！？

「確かリーデルト公爵の所の三男だったか？昨日あの子と話してる所を偶然みちゃったんだけどさ！すごかったぜ？」

あの広間の所での話なんだけどさと前置きをすると声真似入りで話し始めた。

「おい！お前！その獣人の娘！俺の屋敷で使用人にしてやってもいいぞ？」

男が肩に手を置く

「結構です」

肩の手を払って去ろうとする、断られると思っていなかった男はあつけに取られていたが慌てて追いかける

「貴様！この俺が声をかけてやってるといふのに！」

「貴方が誰であろうと関係ないです」

アレこそ一刀両断ってやつだなすっぱりと断っていたよ

「俺はリーデルト」スペンカー！リーデルト家の三男だ！」

「そうですか、では私は忙しいので」

男を無視して去ろうとすると男は腰につけていた剣を抜こうとする

「リーデルト家である俺が下手に出ていれば付け上がりやがって！」

「とそこで男が剣を抜く前にあの嬢ちゃんがリーデルトの三男を反対側の壁まで蹴り飛ばしたんだよ」

「ははは！リーデルトの三男って言えばかなりの美形で引く手数多だと聞いたがああ嬢ちゃんには振られたか！」

イスカって強かったんだな、じゃなくてまだ貴族から狙われるのか、俺が有名になるとその分イスカにも迷惑がかかるのか、何か対策を取っておかないとな。

む、イスカの事が気になって眠れなくなった・・・。

レオ？レオー？レオー？レオーレオーレオーレオー？

・・・一度で聞こえている・・・

レオの魔力ってどんな事が出来る？

・・・一言で表すなら『無』だ・・・

無？何も無いって事？

・・・その通り全てを消し去る力だ・・・

攻撃としてはかなり最強の部類じゃない？

・・・無論、我に敵などいないわ！・・・

そっか、身近の人々は結構最強さんでした。
牢屋の鍵はかかってる、か

風よこの城の構造を調べてくれ《サーチ》！

これで現在位置からイスカの位置兵士達の配置まで手に取るように
わかる、ん？イスカの部屋の前に誰か一人いるな誰だろう？扉を護
衛してた兵士のおっちゃん？じゃないな部屋の護衛は今まで二人い
ただけど今の反応は一人だけ。
そして、今、部屋の中に入ったな！

《風の飛礫》！侵入者を部屋の外へ弾き出せ！

《風の飛礫》：圧縮した風を叩きつける殺傷能力は低いがそれなりに
痛い。魔力量によっては壁を打ち抜く事も可能

侵入者が部屋の外へ弾き飛ばされたのを確認してイスカのベッドの
周りに防音効果付属で結界を張るが、すでにイスカが自分で張った
と思われる結界を感じる。

逃げ出そうとしていた侵入者へ魔法を放つ、《鎖呪縛》（コマンド：動けばさらに締めつける）

侵入者は天井から吊るされてしばらくもがいていたが動かなくなる。体が千切れるまで締め上げるリミットなしにしようかと思ったが骨が折れるまで締め上げる程度で許してやるよ。

イスカの部屋のドアを閉めて眠りにつく。

明日は決勝戦という前日にもかかわらず牢屋にいますナナシです。

「出してくれてもよくない？俺は怪獣じゃないよ？」

「ナナシ、出なくても大丈夫私が入ってくるから、それと昨日はありがとう、またナナシに守ってもらった。」

「ん？何の話？鎖の精霊さんじゃないかな？」

「ナナシがそれでいいならそれでいい」

「それでで侵入者ってなんだったの？」

「リーデルトって家の次男」

「そっか」

兄弟揃ってイスカに惚れたのか、確かにイスカは可愛いもんなあ。

イスカの綺麗な顔を眺めて一人で納得していたのが気に食わなかったのか、ベッドに腰掛けて顔を胸にうずめてくるイスカ、そっと抱きしめて頭を撫でる。

その間にイスカにお守り代わりに魔法を忍ばせておく、これで俺が近くにいらなくても悪い虫は駆除できる！

・・・この魔法は、運が悪ければ死にかなないぞ？・・・

イスカが嫌悪感を抱かなければ発動しないように組み合わせたから大丈夫！イスカに嫌悪感を抱かせただけで犯罪だから！

「ナナシ、私はナナシのモノだよ？」

首を傾げるイスカは最高だね！このまま押し倒そうかな？

「イスカは俺のモノだよ、誰にも渡さない。」

ちゃんと自己主張はしておこう、ちなみに押し倒したり出来ませんよ？ええ・・・わかっています、私はへたれですよ

その日はほぼずっとひざの上にイスカを抱いて過ごす。

そういえば王から何かしらコンタクトがあると思っただんだが何も無いなと気付いたのがその日の夕方、新しい頭の撫で方を考えてた時だった。

向こうから来ないのならばこっちから行こう！

「イスカ、少しどいてくれる？」

ひざの上のイス力をどかせると牢屋から出るための魔法を使う《アンロック》

ガチッという音共に牢の扉が開く

「ナナシどこ行くの？」

「王様に起きましたよって挨拶しに行く」

「なら私も行く」

左腕にくっつくイス力を連れて上の階を目指す。

「き、貴様！どうやって牢屋から脱獄した！」

「魔法で」

「嘘をつくな！あの牢屋は一切の魔法が使えなくなる封魔牢なんぞぞ！」

いや、嘘だといわれてもなあ

・・・今のナナシの魔力は我の魔力と同質だからなあ封魔では封じる事はできません・・・

ああそういうこと

「どこへ行く！」

「いや、王様に起きた事報告しないとね？明日武術大会だって話し

だし」

「王のもとへだと！？王の命を狙うか化け物が！」

「人の姿してるれっきとした人なんですが？」

「そのようなまやかしにはだまされん！」

ああ、めんどくさくなってきた。

《沼呪縛》

「くッ！体が沈む！」

「さあ先に行こうか」

首を縦に振ったイス力を連れて王の間を目指す途中で会った兵士の皆さんには、《沼呪縛》《鎖呪縛》《空間呪縛》いろいろな技で落とし縛り固めて進んでいく。
王の間へ来た俺に一同が驚く

「あの者は！」 「まさか目覚めたというのか！？」 「化け物が！」

おや、会見中だったか

「謁見終わったら呼んでくださいね？」

ボタンと扉を閉じる。

しばらく近くで《鎖呪縛》で捕らえられている兵士のおっちゃんを

弄るかなと思つた矢先、兵士が飛び出てくる。

「貴様！どうやって脱獄した！」

「魔法で？以下略」

どうしてもよさそうな鎖が適当に兵士のおっちゃんを縛り上げていく

「呼んで下さったって事は謁見が済んだって事でいいんですね？
王様？」

王の前でひざまずいている3人を見る、綺麗な顔をしたイケメン、
綺麗な魔法使いっぽいお姉さん、そして魔法使いっぽいイケメンき
つとどつちかは回復とか担当なのかな？どうでもいいのでシカトす
る。

「あ、ああ、それで今日は何の用なのだ？」

「たいした用ではありませんよ？起きたって挨拶しておかないとダ
メかなって思い至っただけですので」

「おい！貴様！このリーデルト様を無視して話を進めるな！大体貴
様は何なのだ！王の間へやってきて無礼であるう！」

「おっとそれはすみませんでした何せ田舎者の庶民なもので」

「さつさと出て行け！」

「では、王様？明日は闘技場へ行けばいいのですか？」

「・・・ああ、こちらから案内をだそう」

「早く出て行け！この愚図が！」

「はいはい・・・」

イスカとリーデルトが睨み合っていた、イスカの頭を撫でながらイスカの部屋へと戻っていく。

わざわざあんな寝心地の悪いところへ戻ってやる気は無い部屋に入ったところで兵士の皆さんを解放する。

この部屋のドアは押して入ってくる内開きのドアなのだがドアを閉まった状態で空間に固定する。

部屋の中でイスカが回収してくれていた俺の荷物を確認していく、剣も回収してくれていたようだ、それにしてもよく折れなかったよねロウエンさんとかダリルとかあんなの攻撃に耐えるとは結構な業物なんじゃ。

とにかく回収してくれたイスカを褒める意味もこめて撫でくりまわす。

しばらくすると、扉の方から潰れた蛙のような声が聞こえた。

扉を開けると顔を抑えて入ってきたのはフィルだった、固定したドアを勢いで開けようとした結果扉にぶつかったわけだ。

「もう！ひどいじゃないの！あんな罷仕掛けるなんて！」

「いや、もう少し落ち着こうよ王女様？」

「それは無理よ！せっかくナナシが地下から出てきたっていうのにお父様には会った後私を無視してイスカの部屋にこもっちゃうなん

て酷いわ!」

「ほら、地下から出てくるだけであんなに兵士が騒ぐものだから王女なんかと会ってたら串刺しにされかねないし」

「ナナシなら槍で突かれても槍が折れるから安心ね!」

おや?と思う、話の感じからナナシが変身したことは知っているようだが怖がっている感じがしない。

「フィル? ほらほら怪獣だぞー?」

?を浮かべたフィルは何か思いついたようで

「きゃーなんとおそろしいけどものの?わたしのていそうがきけんだわ」

コケた、床に突つ伏したナナシを不思議な顔で見下ろすフィル
まず、ものすごい演技が下手すぎる、あと姫ならいきなり下ネタに走らないで欲しい。

「それは反応が間違ってるでしょ?」

「男女が寝室で二人つきり、これは貞操の危機でなくて?」

「イスカが計算に入ってないよ!」

「初めてが3人でなんて・・・やさしくしてね?」

「ちーがーう!」

地団駄をふむナナシの服が引つ張られる、振り返ると

「ナナシ、私も初めてだから優しくして欲しい、出来れば初めては二人がいいけどナナシが3人がいいっていうならそれでもかまわない」

「イスカぁ・・・おまえもかぁ・・・」

ブ。ータス今なら君の気持ちが理解できる、見方に裏切られるってこういう気持ちなんだね。

「まだ少し日は高いようですが気にしては負けですわよね？ナナシは服を着たままの方が好きかしら？」

「ホントにいいじけるぞ？」

「あはは！悪かったわ！だってナナシがおかしな事言うものだからもしかしたらケダモノになって襲いたってアピールかと思ったのよ」

「王女にするアピールじゃないだろ」

なんだかドツと疲れた・・・。

「あれ？ナナシもフィルも脱がないの？」

本気で脱いでいたイスカがそこにいた・・・。

それすら可笑しくて俺とフィル、そして？を浮かべたイスカの3人

で笑い転がっていた。

黒い野望が渦巻く武術大会は最終日を迎える。

その10ゝ色恋沙汰は人傷沙汰ゝ（後書き）

さていろいろ伏線回収いたしますよー

その11　　呆然

昨日まで快晴であつたが武術大会当日は薄暗い曇り空となつていた、まもなく雨が降るかのような空を眺めながら雨はやだなと思つてしまふあたり今日の武術大会は楽なものだ。

なんたつて、結果が決まつてるんだから！

ナナシは気楽な考えと共に城を出るのだった。

スフィリアス家

ん　　ふ　　ふ

機嫌よく装備をつけ武器の確認をしていくリイムを見た一人の奴隷が話しかけた。

「もしかしたら死ぬかもしれないってのに余裕があるのね？」

「私は死なないわよ！それに今日の結果は決まつてるんだから」

何も知らない人がこの言葉だけを聞けばリイムのことをものすごい自信家だととらえるだろう、しかしリイムの自信はナナシとの約束があるからこそその自信であつた。

「何よその自信は、今日の相手はあの化け物じみた奴だつて話じゃないの」

「実はね？・・・」

リィムは奴隷に約束について話す、話してしまったのだ。

奴隷となった者は生涯奴隷から開放される事無くその一生を終える、イスカもナナシがいなければ同じようになっていただろう。

この奴隷もこのスフィーリアス家に奴隷として買われて以来数十年罵詈雑言に時には辱めや体罰にも耐え過ごしてきた。

だが目の前のこの娘は武術大会で少し勝ち進んだだけで開放されると言う、一番困難である決勝という難関を不戦勝という形でクリアして。

「そう・・・おめでとう。」

「ありがとう！」

リィムは気付いていなかった、奴隷の言葉に祝福の意図が含まれていないことを、怨み、嫉みがふんだんにこめられた言葉を送った者は主の下へ足を向けるのだった。

武術大会選手控え室

ナナシとイスカはいつものように話をしているとリィムがやってくる。

「ナナシ！調子はどうだ？」

「やあ！リィム、元気そうだね特に問題は無いよ、と言っても今日は少し出て棄権するだけなんだけどね」

「そんな事言わずに私の相手をしてくれよ、あのモンスターを倒した力を私にも見せてくれ」

いや、アレやったらリイムが死んじゃうから・・・

そんな幸せな時間はすぐに終わりを告げる。

「それでは長らく中断されておりました決勝戦を始めたいと思います、最初に登場するのは美しき赤き竜人！リイムトウス選手！対するは一般とはなにを表す言葉だったのか！一般冒険者ナナシ選手！」

選手説明に酷い差がありますよ？

まあいきなり異形の戦士！とか言われても困るものがあるんですが

「選手の方にはこちらの腕輪をつけていただきます」

何の腕輪だろうか？モニタリング？

「それでは決勝戦！はじめ！」

ここに決勝戦の幕が上がった、空は一層暗くなっていた。

また始まった、ナナシは大丈夫だと言っていたがやはり心配だと選手入場口付近で見ていたイスカは試合の行方を気にするあまり背後に忍び寄る影に気がつかなかった。

「【炎流】」

リイムの手から炎が噴出す

「《氷城》」

ナナシの魔法でリイムとの間に氷の塊が出現し、大爆発を起こす。

衝撃で壁まで飛ばされてから気付く水蒸気爆発か！あたりを蒸気が覆いこみ視界が悪くなる

「【竜炎咆哮】！」

そこへさらに火球で追撃してくる、火球をかわして飛んできた方向に向けてではなく自分の周りに

「《暴風壁》！」

強風が吹き荒れ水蒸気と背後から迫っていたリイムを弾き飛ばす

「そこだ！」

「甘い！」

ナナシの剣とリイムの剣がぶつかる、火花が散り魔法が飛び交う、自分が全力を出しても勝てないかもしれない相手にリイムの中の竜人族としての戦闘本能が歓喜に震えていた。

そして見てしまう、闘技場の観客席の上に浮かぶ《ライト》の魔法そして頭の中で声が聞こえる。

「そいつが例の相手だ、何が何でも『殺せ!』」

「いやだ、ナナシを殺すなんて出来ない!」

「そうか、ならばこうするまでだ『首輪の主人として命じる!目の前の敵を殺せ!』」

ああ・・・そうか、初めから救いなど無かったのか

そこでリイムの意識は消えた。

突然立ち止まり動かなくなったりイムに違和感を感じたナナシは構えを解く事無く対峙する、

もう相手はいいからそろそろ降参した方がいいってことなのかな?

「まあ、待ちたまえ冒険者君、こちらを見たまえ君の右手、もう少し上だ、《ライト》が目印だ」

《ライト》の魔法の近くにはナイフを持った黒ずくめと意識を失っていると思われるイスカの姿だった

「おっと、騒ぐのは得策じゃない事くらいわかるな? 貴様は降参せずそこに立ってればいい、反撃もするんじゃないぞ? 妙なまねをすればどうなるかわかっているな? 剣はしまわずそのまま構えていてもらおうか」

イスカが人質になっている限りこちらは動く事が出来ない、リイム

がこの事に気がついてくれたら・・・

・・・ナナシよ、気付かんか？あの竜人族の娘《従属の首輪》に支配されておるぞ、さっきまでとはくらべものにならん殺気を放っておる・・・

これってもしかして大ピンチ？

「おっとこれはどうした事だ！ナナシ選手急に動きが鈍ったぞ！対するリイムトウース選手はどんどんナナシ選手を追い詰めていく！」

・・・どうしたナナシよ、動きが鈍いぞ？・・・

急に体が重くなったような気がする

「ゴミクス！気付いたようだな貴様のつけている腕輪は特注品でな装備した者を弱化させる効果を持つ、ああ審判が死ぬ前に止めてくれるとか希望を抱かんように教えておいてやろう！その審判は貴様が死ぬまで試合を止める事は無いぞ！ははははは！逃げる！逃げる！」

鈍った動きではリイムの攻撃を完全に避ける事も出来ずこのままではリイムの剣がナナシを捕らえるのも時間の問題だった。

焦点の合っていないリイムは話すことも無く淡々と剣を振るう。

暗闇の中ぼんやりでリイムは目を覚ます、体の8割は氷に覆われていて動く事が出来ない。

目の前には闘技場の様子が映し出されていた、自分がナナシを切り殺そうと剣を振るう、反撃もせずただ避け、耐え続けるナナシ。

やめてよ、ナナシを殺したくなんか無いよ！帰れなくてもいいから、もうやめて！

リイムの声は誰にも届かなかった。

この試合が始まってどれ位経っただろうか体中から血を流し満身創痕のナナシと感情の無い顔で剣を振り続けるリイム

空は黒雲が立ち込めていつ降り出してもおかしくない天気となっていた

やばい、このままだとリイムにやられちまう、この腕輪さえなければ何時間でもなんとかなるんだが

剣と剣を打ち合う、何合目かわからないやり取りをしたその時リイムトウースに異変が起きる

ん？

リイムトウースの目から涙が零れ落ちる。

剣を振るうスピードに変わりは無いし表情にも変化は無いが涙は確かに流れた。

なあ、レオどう思う？

・・・美女の涙ほど心打たれるものは無いな・・・

それが知り合いだって言うんだからなおさらな

そしてまた、剣同士がぶつかる・・・。

あの奴隷は何をちんたらやっているのだ！あの冒険者は弱化しているのだぞ！さっさとしとめ・・・そうか！
ケルテュムの頭にいくつかの言葉がよぎった

「おい奴隷！あの薬を使え！貴様は死んでもかまわんからあの冒険者を殺せ！」

暗闇の中見ているしかないリィムが悲痛に叫ぶ！

「その薬はダメ！やめて！ナナシさん！お願いだから逃げて！」

そして画面のリームトゥースがその薬を飲み込む

変化は突如始まった、リームが何かを飲みこんだと思った次の瞬間、リームの姿が消えナナシの体から鮮血が噴出す。

「いやあああああああああああ！」

リームが作った薬それは竜人族の中に眠る龍の力を呼び起こすものだった。

無表情なリームトゥースの代わりに降り出した雨が彼女の頬を伝っていた。

冷たい輝きを放つ剣が赤くどこまでも紅く染まっていた。

その11 呆然 (後書き)

実はリイムトウースの登場時からこの子はこれがしたいがために作ったキャラだったりします。

サブタイトルのストックが切れました、どうしよ。

マイリストが少しずつ増えるのはいいけどランキングにこの作品が載ることはないと思われる今日この頃、だって他の作品おもしろいんだもの・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9719y/>

痛みとウサギと追いかけて

2011年12月13日02時50分発行